

---

IS × GARO

NAVAHO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS×GARO

### 【コード】

N9077W

### 【作者名】

NAVAHO

### 【あらすじ】

よう、こいつはライトノベルIS”インフィニット・ストラス”と牙狼”GARO”のクロスのSSだ。

書き手の趣味で色々と変わっているから、人によっては嫌悪感があるかもしれない、そういう奴なら、見ない方がいいぜ。

ちなみに俺は、この物語の主人公である織斑一夏の相棒の”ヴリル”って言うんだ。よろしくな。

イメージCV 景山 ヒロノブ

イメージは、ザルバよりも声が低い感じで……

今、言えることは

・主人公最強系かもしれない。よく見る”ORIMURA”もしくは、”ICHIKA”になっているかもな。

・この主人公は、原作と違い 化している。

・主要キャラは、GAROのように死ぬことは一応はないが……どうなることやら……

・作者がやっているいくつかのSSと世界観を共有している。当然、どこかのサイトで見たことのある奴が名前だけで出ているぜ。

どの辺で出てくるかは、知らんし、出てこんかもしれない。

その辺が了承できるのなら、楽しんでくれ、じゃあな!!



## 第零話 其の一(前書き)

やってみたかったGARROとISのクロスオーバーです。

## 第零話 其の一

第零話 其の一「インフィニット・ストラス」

インフィニット・ストラス。本来は宇宙での活動を目的として制作されたパワードスーツである。

その能力は、既存の兵器をはるかに凌駕する高いモノを持つ。しかし、この兵器には一点だけ、奇妙な特徴がある。

”ISは女性にしか起動できない”

これは、世界の常識であるがここにそれを覆した例外が存在している。

ここにいる、織斑一夏という人物がそれである。女性しか扱うことのできない”IS”を世界で唯一動かすことのできる男性である。

「しかし、厄介なことになったな一夏。どうするんだ？この様は……」

ここに渋い声が響き渡った。それを発しているのは、金属製の狼の被りモノをした髑髏を模したエンブレムが付けられた腕輪である。

「……………そうだね。私としても、これは、どうしていいものか、分からない」

応えたのは、一夏と言う人物。この物語の主人公である。この人物、男性というのは少しばかり声と口調がそれらしくない。

それもそのはず、この人物の外見は男というよりも見た目は完全に”女”である。

肩まで伸ばされた黒髪と男性とは思えないほどの色白の肌で、肩幅は女性よりはあるが、男性としては頼りないほど華奢だ。

「ったくよ〜、分からないで済まされるか。お前の事で東西南北の”番犬所”が揉めているだけ。あとお前から、この事が公になったら……………つか、誰だよ、あんなところにIS置いた馬鹿は!？」

腕輪は、何とも煮え切れない態度の一夏と訳の分らなかつた状況に對して口調を荒げていた。一夏は、

「わかってているよ”ヴリル”。”掟”を大きく破ることになるのは分かってている。その先は言わなくても大丈夫だから」

一夏は、そう言いつつ、ヴリルの言葉に応えた。

「”掟”も厄介だが、お前自身も厄介だぞ。注目され過ぎて、動きが取りにくい。今夜も”陰我”から、出てきたみたいだな」

「わかつている。だけど、これは、さすがに私も鬱陶しく思う」

自室の窓から、自宅の様子を窺っている黒服の男がいる。他にも何人かが自分を監視しているのが分かる。連日連夜、IS関連のニュースは自分を報道している。さらには、どここの所属かわからない者もよく目にする。

「そうだな。まあ、どんなに優秀とはいえ、人間だからな。ごまかしは大丈夫だろう」

「それじゃ、アレを行うとしようか、その間は喋らないでくれよ”ヴリル”」

そう言いながら、一夏はあるモノを自室の机の中から取り出した。それは、拳ほどある干からびた巨大な眼球であった。

「いつみてもエグイもんだな、気色悪いつたらありやしない」

「……うるさいぞ、ヴリル。喋らないでと言っただけだよ」

そういう一夏の言葉にヴリルは、

「ああ、悪い、悪い。俺は、こういうのがどうも苦手だな」

意外と、繊細な神経な持ち主のようである。ヴリルに構わず、一夏は眼球に奇妙な模様を描き込み、赤い札を張り付けた。

「フン、貴様の存在そのものが、人によっては受け入れがたいのに、よく言えるモノだ」

そこに二人？とは違う第三者の音が響く。

「おい、こいつは、珍しいな。一夏、姐さんがいるぜ」

いつの間にか一夏の部屋の戸が開けられており、腕組をしたスーツの女性が立っていた。顔立ちは、一夏と瓜二つである。

「何が、姐さんだ。お前にそう言われる筋合いはない」

フンと鼻を鳴らし、一夏の姉 織斑千冬は忌々しそうにヴリルに視線を向け、打って変って憂いを帯びた視線を一夏に向けた。

「……………一夏。分かっているが、お前は世界で唯一のISを起動させた”男”として、IS学園に行くことになった」

対する一夏は、干からびた眼球から千冬に視線を返す。一夏もどうしようもないのか、悟ったように頷いた。

「分かっています。ですが、これだけは、やめるつもりはありません」

「なあ、一夏。これは、一つの転機だ。もうここで辞めても、誰もお前を責める権利はない。私はここでやめてほしいんだ、そう言うてくれ……!」

体当たりをするように、千冬は一夏の肩を掴み正面から向かう。自分とよく似ている、目つきの鋭さも……

「それになんだ、その目つきは、少し見ない間にまた、悪くなって



た。

「……姉さん。あまり見ないでほしいな、見られると恥ずかしいんだ」

居心地が悪そうに千冬の視線から自身の胸を手で隠した。

「まったく、男のくせに胸を見られることが恥ずかしいとは……」

家族の様子に思わず苦笑がこぼれてしまう。一夏は、女よりも奥ゆかしいところがある。

「そうだぜ、一夏は結構、初心というか、恥ずかしがり屋だな」

「うるさい！……！お前は口を出すな！……！……！」

ヴリルの言葉に千冬がまた声を荒げる。先ほどの一夏とはえらい違いである。

「まあ。いいじゃないかよ、姐さん。それよりも一夏、”ホラー”がそろそろ動きだす」

「……分かった。早く、目をこまかして行くよ。姉さん、話はまた後でもいいかな」

「待て一夏！……！……！話は終わってはいないんだぞ！……！……！……！」

千冬を半ばスルーしつつも、申し訳がなさそうに視線を向けて、一夏は背を向けた。手に取るのは、銀でできた弓矢とつつを。

「分かっているよ。でも、姉さん。これだけは私も譲れないんだ。今さら、全てを忘れて生きるほど、私は器用じゃないから」

そう言って、一夏は千冬から離れていく。

「待てッ！……！！！」

一夏を追う千冬だが、部屋を出たと同時にその姿はなくなった。

## 第零話 其の一（後書き）

続きまして、其の二です。エンピツ、

第零話 其の二(前書お)

其の二は。きんぐー………

## 第零話 其の二

### 魔戒騎士

古よりホラーを狩る宿命を負った戦士達の総称。

神出鬼没の魔銃ホラーに対抗すべく、強靱な肉体と精神を併せ持った戦士である。

基本的には、男性のみがその資格を得られる。

「この頃はまだ、あいつが自分の”身体”の事について、疑問もなく男と思っていたな」

一夏が出て行ったあと、千冬は普段はあまり引っ張り出さないアル

バムを眺めていた。

アルバムにいる一夏は、まだあどけない表情をしている。今よりも目元は穏やかだ。

古くは、小学生に入るか入らないかの頃だ。この頃から、女の子のようだった。

千冬

花が好きで、私に積んできた花、種から咲かした花を良く見せてくれていた。

今も花が好きで、この家の庭には様々な種類の花があったのだが、IS学園への入学と寮生活が決まったがために殆どのモノがなくなっている。

意外と手間のかかるモノが多く、世話ができないのならばと一夏は知っている知人に渡している。

そういえば、レストランアギトにも提供したと言っていたな、後は、ディアボロとミレニアムアミーゴとか……

家の様子が変わってしまうのは寂しいが、これは仕方がないだろう。

無責任に世話ができないからといって枯らすよりも、世話をしてくれる誰かに託す方が、花のためにもなる。

それにしても、こんなにも優しい趣味を持っているあいつが何故、あのような戦いをせねばならんのだ。

何度いっても、戦いをやめるとはいわない。

まったくあいつは、どうしてああも頑固なんだ。まるで私の言う事を聞かない。

束の奴は、いっくんのあの頑固な所はちーちゃん似だね。とか言っていたが、自分に似ていると言われるだけで嫌になる。

一夏 私のかけがえのない家族であり、宝物。両親が私を捨て、只一人残された唯一の肉親。

その一夏は、人とは違う悩みを持って生まれたのだ。インターセックス、男でも女でもない身体と心を持って。

”この前、女の子に気持ち悪いって言われちゃった”

” どうしてだろう、好きってのがよくわからない ”

あいつは、そのことをずっと悩んでいた。だからこそ、護りぬくと誓ったのに…

なのに、あいつは私に黙って、魔戒騎士などというものになってしまった。

世の中の男にはISが嫌いな者がいるが、私はこの魔戒騎士というものが嫌いなのだ。

あのような戦いに一夏が夜の度に赴いていることで、私は夜すら嫌いになってしまった。

夜が来るたびに、不安に駆られてしまう。この間の件で魔戒騎士であることは認めだが、魔戒騎士そのものに対しては嫌悪がある。

護ることに憧れてしまったのは、あるいはみ自分のせいであることも分かっている。だが、どうすればいい

私はもつと、自分の我を通すべきだったのだろうか？ 利己的な人間であればよかったのだろうか？ 他人の事など気に掛けなければよかったのか？

いや、そんな生き方は私にはできない。私という存在が一夏をあのよう護る側へと駆り立ててしまったのだろうか？

たった一人の家族が、血なまぐさい、最も人間の邪悪で醜い心がさらけ出される戦いに赴くのは、許容ができない。

認めたとはいったのだが、こうして事がある度に魔戒騎士とは別の生き方があると言っては、それをやめさせようとしているのは我ながら女々しい。

現に今しがた一夏に言っていた”IS インフィニット・ストラス”に至ってもそうだ。

世界で唯一ISを動かせる男。正確には中性で、男女どちらでもない。この事は、IS委員会には知られているが、ここまで話が大きくなってしまつては隠すしかないのが現状らしい。

いっそのこと、一夏が女でしたと言えればどれだけ楽だろうか……女にしては、少し空気が読めなさすぎだがな。かといって男にしては、繊細すぎるし、

現実にはそう言えないのが辛い。世界最強の女 織斑千冬ともあるうものが情けない。

戦いに赴くたびにあいつは、必ず戻る。信じて待っていてくれと言うのだ。私は信じるが、だが、それすら揺らぐものの不安を抱かずにはいられない。

あいつが戦う相手は、世界最強の兵器ISすら滅ぼすことのかなわない人知を超えた恐ろしいものであり、それは私達が生まれる大昔から夜の闇にいたというもの。

束の奴も、アレを見てから少しは大人になったな。それぐらいアレはインパクトがあった。

今夜も戦いが始まっている。私達が知ることのない闇の世界で……

あいつは、私の家族はそこにいる。

それにしても、外に居る監視はおそらくは政府のものだろうが、当の監視の対象が居なくなったのに未だに気がつかないのか？

一夏の部屋にあるあの気味の悪いものの影響でああなっていると思うと、背筋が寒くなるな。

光あるところに、漆黒の闇ありき。古の時代より、人類は闇を恐れた。

しかし、暗黒を断ち切る騎士の剣によって、人類は希望の光を得たのだ。

一夏は、町の外れにある古びた教会の中に居た。

「あのホラーは、確かアリマ。女の偶像に取り付く奴だ。近頃、多いな」

「最近は”女尊男卑”の世の中を肌で実感してるからね。そういう陰我が多いんだろう、ヴリル」

一夏の前には、不気味なオーラを醸し出すマリア像があった。その足元には、人が身につけていたであろう衣服が散乱していた。

”キサマツ……何をしに此処へ来た。私の餌になりに来たのか”

ブロンズのマリア像が醜悪な笑みを浮かべて、一夏に問いかける。  
一夏は気にせず

「お前を狩りに来た。来て早々悪いけど、この場から消えてもらおうよ」

そっぴいなながら、弓を構え、矢を放つ。

放たれた矢がマリア像の額を貫いたと同時に、マリアの顔がわれ、醜悪の悪魔がその姿を現す。

”オマエツ、魔戒法師だね。だけど、やられるわけにはいかない！  
！！！！”

マリアの顔から現れた醜悪な悪魔が吼える。皮膚が反転し、中身がそのまま露になった異形　ホラー　アリマ。

「ッ！！！！？！」

予想よりも早い動きに一夏は銀の弓を刃のようにして、迫る爪を弾き、距離を取る。

「一夏。下級ホラーには違いないが、侮るなよ。それなりに厄介だ」

「分かっている」

距離を置き、矢を再びアリマに放つ。放たれた矢は、空を切りアリマの膝の命中する。命中したと同時に、パンと弾ける音が響く。

”ほう……少しはやるようだな。だが、魔戒法師程度では、私を倒せんッ！！！！！！”

力を解放し、アリマは姿をさらに変化させる。その体は、先ほどの奇怪なものから女性的なシルエットを持ち、衣のような触手を持った姿へと……

宙に浮き、ステンドグラスに浮かぶ黒いマリアの姿。顔は先ほどの醜悪な悪魔の顔から、整ってはいるが内から現れる邪気を放っていた。



攻撃を寸前のところで交わし、勢いに任せて本体に近づき、強烈な斬撃を放つ。

右側面アリマの貌を切り裂き、そのまま一気に両断する。

”ば、馬鹿なツ！！？！女が何故、鎧を……”

未だに信じられないのか、アリマは消滅する間際まで一夏を女であると思っていた。

「言っているだろう、私はどちらでもない。だからこそ、鎧を使うこともできるし、ISも動かせたんだよ」

アリアの消滅とともに教会の中に風が吹き荒れる。

「いつかは、今までになかったことが現実になる。俺にしちゃあ、ISの存在が信じられないもんだがね」

「そうだね、ISなんて創造の産物でしかなかったんだから、この10年間は信じられないことばかりだったんじゃないかな」

一夏は、荒れ果てた教会に背を向け、この場を後にした。

誰も居なくなつた教会の跡に残されたものの中に、こんなものが……

” 史上初 世界初 ISを起動させた男子 織斑 一夏”

の記事が……

顔写真は載っては居ないが、背を向けて自宅に向かう後姿だけが掲

載されていた。

それから二カ月後、一夏はIS学園へと入学する。

## 第零話 其の二（後書き）

やっちゃいましたISSのSS。この物語の一夏は、ある作品の主人公と対極になるようにしています。

ある作品とは、私が前にやっていたライダーのクロスSSなんです  
が、こちらも

区切りのいいところで投稿をしたいと思います。

週一のペースが理想ですが、何処まで維持できるかが悩みどころです。

## 第巻話「IS学園」(前書き)

いよいよ、本編が始まります。PVが既に3000越え、感想まで頂き、すぐモチベーションがあがってきます。ありがとござい  
ます………!!

それでは、どうぞ………!!

ホラー

闇に潜み、古より魔界に生息し、陰我のあるオブジェより出現し人間を襲い、その魂を食らう魔獣。

ホラーは、我々の世界の生物のどの生態系にも属さないために、古より妖怪、悪魔として伝わっている。

彼らは人間、物に憑依し実体化する。特に人間が憑依される事は”死”と同じであり、その魂は安らぎを得ることなく苦しみ続ける。

陰我

森羅万象に存在する闇。それは、主に人間の持つ負の感情、邪心や欲望である。

此処に宿った”陰我”をオブジェにして、ホラーは我々の世界へ現れ、人間を捕食する。

四月某日

一夏はモノレールに乗っていた。周りには、IS学園の制服を着た女子が自分を見て少し騒いでいた。乗っている乗客は、皆女性である。

「しかしまあ、女の園とはよく言ったモノだ。あ、一夏も一応は……」  
女なんだよなと言いたかったが、言えなかった。ヴリルなりに気を使っているのだろうか？

「確かにね。私は今まで、男で通してきたんだ。今さら、女の方に変えるつもりはないよ」

一夏は、少しため息を吐き、そう応えるのだった。正直、人ごみは好きではないが、世界初の男性のIS操縦者として学園に行かねばならないのだ。気がめいってしまう。

今、ヴリルは腕輪ではなくペンダントになっている。理由は、言うまでもなく姉である千冬の目を逃れるためである。

「姐さんは、どうして俺にはめちやくちやあたるのかね」

「仕方ないよ。きっかけは、私がお前に応えた事が魔戒騎士入りを決めてしまったんだ。姐さんに相談もなしだったから……」

一夏は、たった一人の肉親である姉の事を想った。

物心つく頃から、両親はいなかった。分かっているのは、姉と自分を捨てて何処かへ行ってしまったことだ。

故に私にとって家族は姉だけで、姉にとっても私だけが家族だった。だからこそ、姉は私を護ろうとした。

十代のまだ、青春真っ盛りのころに学校と仕事に奔走して、ここまです私を育ててくれた姉には感謝しきれない。

そんな姉の気持ちを踏みにじるかのように魔戒騎士として戦う事を選んできました。幼いときに彼らに出会い、護りしモノである彼らの生き方に共感し、いつの間にかその修練に明け暮れていた。

姉が仕事に忙しく、めったに家に帰ってこれないのは少しさびしか

ったが、この事がばれるよりは良かったと思っていた。

一年前のあの日、何故か姉が帰っており、ホラーとの戦いで傷ついてしまった私と鉢合わせしてしまったのだ。

”一夏!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!”

私を見るや、駆け出した姉の顔は今も忘れられない。怒っていて、今にも泣き出しそうな顔を……

”なぜ、私に何も言わなかった!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!なぜ、お前がそんなことをやらねばならんだ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!”

この事を巡って、初めての姉弟喧嘩を始めたのだ。私は、当然やめる気にはなれなかった。姉には悪いが、もう私は引き返せないところまで関わってしまったのだ。

だからやめられない。姉もまた、私に何度もやり直せる、今から別の生き方を選ぶことができると言ってきかせた。

私ひとりでは、姉とこじれたままだったかもしれない。だけど、一年前のあの日に出会った”仲間達”が私達を支えてくれた。

仲間達は、それぞれが不思議な宿星をもった者達だ。時々仲間の所にはお邪魔させてもらっている。

「しかし、周りの娘っ子達は、何を騒いでいるのかね?と言いたいところだが、やっぱり一夏が姐さんに似ているからか?」

ヴリルの言葉の通り、周りの女生徒達は私の姿を見ては”千冬様?

”、” 千冬お姉さまにそっくり”と話しているのを聞く。

「そつだね。私は時々、姉さんに間違えられるから」

私が、姉と間違えられたのはかなりの数に上り、そのたびに”人違いだ”と言ってきた。

そう姉は、IS操縦者の中では格別の存在であり、世の女性たちの憧れである。

かつての日本代表にして、ISの世界大会であるモンド・グロツンの第一回 総合優勝者。故に不敗乙女 ブリュンヒルデと言われ、今尚熱狂的な人気を誇っている。

「目つきの鋭さも益々似てきたしな」

「それは、よくわからないけど。姉さんの言うように昔ほど、穏やかな顔はしてないみたいだしね」

ふと、視線を向けると反射した窓に姉と瓜二つの貌を持った自分の姿あった。髪は姉よりも短く、目は確かに鋭い。

姉からは、目つきが悪いとよく言われる。この間も”また、悪くなっている”と嘆いていた。

「さて、そろそろIS学園だ。ヴリル、二人きりになるまでは絶対にしゃべらないですよ。私がいいと判断するまでは…」

「ああ、分かっている。しかしなんだ、この学園は、感じたところかなりの”陰我”の要素がある。今まで、ホラーが出てこなかった

のが不思議だ」

ここに来る前に姉からは、ヴリルを持って行くなと言われていたが、一夏としては一人？にしておくことができなかったので、連れてきたのだった。

「感謝するぜ一夏。楽しい学園生活を送ってこい。俺は、ここで見守ってるからよ」

「ふふ、ありがとう、ヴリル」

私はこれから三年を過ごすIS学園へと足を踏み入れた。

一夏

本当に女子しかいないのか。ISは女性にしか起動できない、それゆえ関係するのは女性が多い。操縦者、その開発にしてもだ。

あらかじめ、聞いてはいたがこれは、男が一人だけだと相当きつい。一応、私も男なのだけれど、女でもあるので特にプレッシャーにはなっていない。

「全員、揃っていますね。SHRを始めますよ〜」

私の席は、真ん中の一番前だ。これは、さすがに目立つし、正直隅っこがありがたかったのだけれど、誰がここにしたのか？

「それでは、次は織斑君……………」

ここで先生の声が少しだけ小さくなった。理由は言うまでもなく、私の外見であろう。

「…………はい」

少し、考え事をしていただけの自分でもはっきり分かるほど低い声をしていた。まるで怒っているかのような、ついでに言うときも姉曰く相当悪くなっているの、そう取られてもおかしくはないかも…………

「ひつ、も、もしかして怒った？あ、う、ごめんね。今、自己紹介をしていて”あ”から始まる人からで、今は”お”なんだよねっ！だからね、自己紹介してくれるかなっ！ご、ごめんねっ！」

「別に謝らなくてもいいですよ。少し考え事をしていただけですから、山田先生」

どうみてもテンパっている山田先生を安心させるために私は、少しだけ笑いかけた後、席を立ち。

「織斑一夏です。世界初の男性のIS操縦者ということですが、まだ皆と比べて分からないことだらけです。迷惑をかけるかも知れま

せんが、一年間よろしく願います」

無難に頭を下げるが、”えっ、ほんとに男？””声がセクシー”、  
”本当は女の子じゃ”、”千冬様そっくり””織斑って”

色々と囁きが聞こえるが、挨拶はこんなものでいいだろう。なぜか、  
山田先生は私を見て、呆けている。不思議に思いながら、席に着こ  
うとした時だった。

「なんだ、まだSHRは終わっていなかったのか？」

私にとっては、もっともなじみ深い声でした。ヴリル辺りは、”お  
おっ、姐さん”と言うだろう。そうだ、姉さんだ。

「あ、織斑先生。職員会議は終わられたんですか？」

「ああ、すまないな。山田先生、慣れないことを押しつけてしまっ  
て」

姉は山田先生に笑いかけていた。先生が小声で”織斑君と同じ”と  
僅かに聞こえた。

「い、いいえ、副担任としてこれぐらいは、当然です」

えへんと胸を張る山田先生は、何処となく微笑ましく見える。

「諸君、私が”織斑千冬”だ。君たち新人を一年で使い物になる操  
縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。

出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を

十六歳までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

姉がまるで演説をするように力強く自己紹介をした。言ってる事は、暴力的だが説得力がある。さすがは、ブリュンヒルデと言う所か。

「キヤアアアアアッ！！！！千冬様、本物の千冬様よッ！！！！」

「ずっとファンでしたッ！！！！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんですっ！北九州からッ！！」

「私、お姉様のためなら死ねますっ！！」

「織斑君と同じ顔っ！！?!?!」

さすがは、姉さんです。世界の女性から多くの支持を集めているだけあります。ヴリル辺りは、ここで何かを言いたいと思うところだろう。

「……………毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

姉さんは、うっとうしそうな顔で一組全体を見回した。

姉さんは、こっぴつのが苦手だからね。それをいうなら、私もか…………

「キヤアアアアアアアアアッ！！お姉様ッ！！もっと叱ってっ！！！！罵って！！！！」

「でも時には優しくしてっ！」

「そしてつけあがらないように躡をして~~~~!!!!」

普通なら鬻ぎものだが、流石は姉さん。盛り上げています。

あの無愛想な黄金騎士なら、印象最悪かもしれない。

姉は溜息をつきながら額に手を当てる。それすら絵になっているのはすごい。

「それと、一夏。山田先生を怯えさせるな。私の印象が悪くなる」

どうやら、先ほどのアレを物陰から見ているらしい。別に怯えさせては居ませんが、

「……………それは、私の目付きが悪いと言いたいのですか？織斑先生」

「馬鹿モノと言いたいところだが、今は、千冬姉でいい、お前は双子と言っていていいほど私に似ている。もう少し、表情を和らげろ」

そんなことを言う姉さんに対して、山田先生は何かを言おうとしているが、会話の波に乗り切れないらしい。

「男一人の状況でどうしろと……………」

「戸惑うのは仕方ないが、お前も一応は……………」

女と言いたいのですか。でも、言えないんですよ。私も女である

ことは自覚していますけど、戸籍上は男ですから、

「まあ、これからは学園にいる時は織斑先生で通してもらうぞ、織斑、それと……」

そう言って、私の腕をつかみだした。この腕は、腕輪だった頃のヴリルを付けていた。

「よし。あの不届きモノはいないようだな。この学園に来たからには、お前も晴れて、こっち側だ。向こう側に関わることはない」

そう言いながら、再び、一組全体に視線を向け

「先ほどのやり取りで分かってもらえたが、こいつが世界初の男性のIS操縦者にして、私の弟の織斑一夏だ。私に似ないで目付きだけが悪く、少し硬いが、まあよろしく頼む」

「ええッ、うそ……!!」

「やっぱりっ!!?!?!」

「いいなあ、変わってほしいな」

クラスメイトがやたら騒いでいる。正直、姉のこれは有難迷惑だ。

「織斑先生。公私を分けた方がよろしいのでは……と私は思うのですが」

「そうだな、先生としては、あまり社交性のないお前にその辺のところを直してもらいたいのだからな」

私をこの席にしたのはあなたでしたか、職権乱用と言いたいところですが、まあいいでしょう。いずれ慣れますから。

確かに私は、友達が多い方ではない……中学の頃は、鳳と弾ぐらいしか知り合いがいませんでしたし……

「分かりました」

何故か、姉は嬉々として私をこちら側に染める気満々だ。こちら側の世界。確かにホラーはいませんけど、それなりに”陰我”はあると思いますよ。

”番犬所”からは、まだ通達、連絡は来ていない。これから、どうすべきか……

そういえば、幼馴染の篤が居た。向こうは、私を覚えてくれているかどうかわからないが、私は覚えている。忘れるわけがない。

これでいいだろう。これで一夏もあちら側の事には気を回せなくなる。

我ながら女々しいが、一夏はあまりにもあちら側に染まり過ぎている。中学時代の私は、一夏を護ろうという一心で、かなり怖い人物だったらしい。

故に時々、怖がらせてしまったこともある。一夏も中学生の頃は、人を寄せ付けなかったという。修学旅行の写真も隅のほうにしか写っていない。昔の恩師曰く”織斑の再来だ”と言っていたが、私はそんなに恐ろしい人物だったのか？

ISを一夏が動かしたのは、本当に驚いたが、それはそれで、一夏が別の生き方ができると思ったからだ。私としては、魔戒騎士であることを認めたとはいっているが、実を言えば、一夏には今すぐ辞めてほしい。

あのヴリルという不屈きモノは、私との相性は最悪だ。私のペースがすぐに乱される。あの不屈きモノは、それを面白がっているから始末が悪い。一夏も一夏だ、ろくなモノを持っていない。

ここならば、多少は不自由な思いはさせても、危険な夜の戦いに赴くことはない。実を言えば、ISにもあまり関わってほしくはなかったのだが、魔戒騎士よりはISの方がましだ。

ISは、国家の力に関わる故に扱いには慎重さが求められる。故に女尊男卑という風潮が社会問題になっている。

一部で言っているだけで、大きなというわけではない。唯一の男で

ISを起動できる一夏の希少性は言うまでもない。正確には、IS  
”インターセックス”中性”ではあるが。

一夏ならば、一人でもやってはいけるだろう、その希少性を考える  
と非常に危うい立場だ。男でも女でもない故に、男女どちらにも付  
く事が出来ず、ISを動かしたことにより、この世界のどこにもま  
ともな居場所すらない。

いや、むしろ私が一夏から離れられないのだろう。どんなに栄光を  
称賛を浴びようと、私にとってそれは、一夏以上のものではない  
のだ。

中学を卒業したら、本格的に魔戒騎士の務めに従事するかと考えて  
いたが、意外にも一夏は進学を考えていた。もし、魔戒騎士の務め  
に従事するようなら、徹底抗戦も辞さない覚悟をしていたのは、私  
だけの秘密だ。せめて高校、できれば大学卒業も……

あの不屈きモノ曰く

”あれだ、一夏は姐さんの事をそうとう気遣っているんだぜ”

少しでも私を安心させたいのだろうか？あいつの生き方は、常に誰  
かのためなのだろう。魔戒騎士がそうであるように……

本来なら、見守る事が筋なのだが、私はただ見守ることができない。  
故に、事あるごとに魔戒騎士とは別の生き方があることを一夏に言  
っている。

この学園で、一夏がどう過ごすかは私にもわからない。私のこの気  
持ちを、一夏は分かってくれているだろうか？

お前を危険な場所に行かせたくないことを……

だが、ここならば、”ホラー”が現れることはない、一夏も魔戒騎士とは別の行き方を見つけてくれるかもしれない。

第

一夏。お前、すごく綺麗になったなって、男に言うことじゃないよな。

最初お前と出会ったとき、女だと思っていた。真実は男だった。

私が男女に対して、お前は女男だった。だけど、お前はその辺の男子よりも男らしく、私を護ってくれた。

あの時は、女そのものだったが、成長すればすごくかっこよくなる  
と思っていたのだが……

なんだ？その華奢な身体は、長い髪は、白い肌は？カッコよくなっ  
たとは言えないではないか！！！！

お前が私に綺麗になったと言っても嫌味にしか聞こえんぞ！！！！！！  
それに目付きは千冬さんによく似ている。千冬さんは、そこは似て  
ないと言っているが……

一種の近寄りがたさを感じるところもそっくりだ。あの頃のお前は、  
千冬さんとは正反対だと思っていたが、やはり姉弟だから、似てし  
まうのだろうか？

いやいや、あの人と私が似てしまうのだけは勘弁したい。あんな奴  
に似たくない。そんな事を考えていたら、いつの間にか一夏が私の  
前に立っていた。

「い、一夏っ！！？！！！」

いつの間にか目の前に立っている幼馴染に対して、筭は思わず声が  
上ずってしまった。

「どづしたの筭。そんなに慌てて」

らしくない幼馴染の様子に一夏は、思わず苦笑してしまった。

「な、何を言うか!??!い、いきなり話しかけるな!!!?!」

反射的に怒鳴ってしまうのは、一夏のよく知る箒像である。

「こ、ここでは何だ、少し外へ出るぞ。付き合え」

どもりながらも箒は、注目を浴びるのが嫌なのか一夏を教室の外へ連れ出すのであった。

「そうだね。私も少し外の空気が吸いたいと思っていたところだ」

一組の教室前には、唯一の男性のIS操縦者を一目見ようと学年中の女子が溢れ返っていた。

まさかここまでではと思う一夏ではあったが、表情は崩しては居ない。

”あれが世界で唯一ISを動かせる男子なんだって”

”ええっ、女の子にしか見えないんだけど、ていうか、千冬様そっ

くりなんだけど……”

対する筈は、少しだけ表情を歪ませた。

（何だ、一夏がそんなに珍しいのか？ 言うておくが、私は幼馴染なんだ）

周りからちらほらと

”篠乃之さん、抜け駆け？”

”先を越されたッ！？！”

”大丈夫、まだチャンスはあるわ”

などと聞こえてくるが、二人はそのまま屋上へと足を向けた。

一夏

「……………」

先ほどから筈は、何も喋らない。当然か、私から呼び出したのだ。

「改めて言うね、箒。久しぶり」

「……ああ、そうだな」

私が話しかけると、箒は何処となく緊張したように返事を返してくれた。

「六年ぶりだけど、箒は変わらないね。一目で箒だってわかったよ」

「な、何だとっ！？！わ、私が成長してないとしても言いたいのか！？！」

顔を真っ赤にして、怒鳴られました。そういうわけじゃないんだ。

「いや、髪形と私があげたりボン、まだしてくれてるんだってね」

箒は、焦ったようにリボンと髪型に手をやる。

「……ああ、これが一番楽だからな」

少しだけ、視線を私から外し照れたように応えてくれた。

「ふふ………そういう所は昔から変わってないね。相変わらずで、何よりだよ」

「何だ、お前は、目付きが鋭く、悪くなっているせに………」

箒は私に仕返しをしたいのか、姉と同様に目つきの悪さを指摘する。

「そうだね…姉さん曰く、昔ほど穏やかな目はしていないみたいだし」

篝

「そうだね…姉さん曰く、昔ほど穏やかな目はしていないみたいだし」

一夏は、何処となく寂しそうな顔をしていた。私が知らない表情だ。いや、六年も離れていたのだ、私が知らない表情があつて当然だ。

ここで、気の利いたことが言えればいいのだが、口下手な私にはそんなことは言えない。これが嫌になる。

嫌な沈黙が少しばかり続いたが、

「篝、そろそろ戻ろうか。遅れると姉さんが怖いよ」

ここで一夏が私に手を差し伸べてくれた。素直に取ればよかったのに

「何だっ!?!もう子供じゃないんだぞ!?!?!手なんて恥ずかし

くてつなげられるかっ!?!」

恥ずかしさのあまり私は、手を取ることなく一夏に背を向けてしまった。

一夏の顔が見れない。恥ずかしくて……こんな自分を見せられない。嫌だ、素直に一夏に触れ合いたかったのに、何故?

自己嫌悪に陥りながら、私は教室に戻っていった。

「だけど、一夏。お前は、あの頃と変わっていないぞ」

私は、自分でも分かるくらい頬が熱かったのを感じていた。その後、クラスメイトから何があつたのかを追求されてしまった。

屋上に残った一夏は、箒の背を見送りながら

「……やっぱり、六年も経つと箒も変わるのかな」

と呟いた。

「いや、一夏。そうでもないぞ、変わるものもあれば、変わらないものもある」

ここで、一夏の胸に居たヴリルが制服越しに語りかけた。

「何だ、ヴリル。私がいいというまで、喋るなどといったはずだけど」

「硬いことは言っな。箒だっけ、鈴の前に一緒だったんだよな」

「……小学四年生までは一緒に居たんだ。これは、前にも言ったはずだけど」

「そういえばそうだったな。あの嬢ちゃんには、間接的ではあったが、この前、会ってたもんな」

ヴリルの言葉に、一夏は少しだけ目元をきつくした。

「ヴリル、確かにアレは、箒が関わったといっても、ほんのきつかけだから、会ってたとはいえないよ」

「ああ、あの時はホラー狩りの最中だし、巻き込むわけには行かなかったからな、俺としては、再会して、剣道の全国大会の優勝祝つてあげてほしかったな」

「……あのときの優勝は、箒にとってはいい思い出ではないよ。あそこで祝つても、箒を悲しませるだけだ」

「わかってるぜ。あの嬢ちゃんは何だか、放っておけないな。かなり危なっかしい」

一夏も同意する。篤は、あまり要領がよくなく、かなり不器用だ。それは、幼い頃から知っている。いじめにもあってきたこともあった。

「まあ、嬢ちゃん以外にも危なっかしいのはそれなりにいる。姐さんには悪いが、ここは、”陰我”を生みやすい要素がかなりある、ホラーが現れる可能性がそれなりにある……」

ヴリルの言う通りである。

世界の軍事バランスを一変させたISは、国家の”力”の象徴であり、その”力”に対する姿勢は、凄まじいものがある。

故に様々な陰謀や欲望が渦巻いている。このIS学園もまた同じであり、国連の思惑により日本政府が運営、管理しており、各国からの留学生に紛れて諜報員が多数紛れ込んでいる。

国の欲望だけでなく、個人の欲望もまた存在し、それが負の方向に走れば邪心となり、”陰我”を生むのだ。それは、ISが絶対的な力の象徴であるからゆえである。

「今は、私の存在が”陰我”を生むかもしれない。世界で唯一の男性のIS操縦者であるから」

「確かにな。だが、お前の使命は何だ。一夏」

「分かっている。私の使命はホラーを狩る事、護りし者として戦うことだ」

「よし、それでこそ、一夏だ。そろそろ行くとするか。俺は黙っておくから、安心しな」

丁度、チャイムが鳴り一夏は教室に戻るのだった。

第巻話「IS学園」（後書き）

一夏、IS学園に入学です。幼馴染との再会と学園に対しての不安を覚えていきます。

ここで、少し、ガ口風に予告をしておきたいと思います。

それでは、では！！！！！！

世界初の男性のIS操縦者 織斑一夏

そして、俺の相棒。女にしか扱えない兵器を扱える男に対して世の女は、一夏に何を見る。

ここに一夏に近づく女が居た。見た感じ、”女尊男卑”の考えの染まった今時の小娘だ。

次回！ セシリア・オルコット

一応、言つとくが一夏も女だぞ。だが、こいつは、口が裂けても小娘には言えねえな。

## 第2話「セシリア・オルコット」(前書き)

少し早いですが、テンションが上がりましたので、早い段階で掲載します。

GNZさん、tokki-兄さん、バラモ-クさん、白砂糖さん、感想ありがとうございます。

## 第弐話「セシリア・オルコット」

「私とあいつとは、何も無い。ただの幼馴染だ」

チャイムが鳴り、席に着いた箒はクラスメイト達からの質問攻めから開放され安堵の息をついていた。

箒

” 何もない” 自分でいうのも何だが、虚しい気持ちになる。本当は一夏に会いたくて、しかたがなかった。

一夏は、私にとって初めて好きになった異性 初恋の人だからだ。

一夏の事を思うと自然に手をやるのは、このリボンと髪型。これは、幼い頃一夏が私にしてくれた髪形だ。

幼い頃から、私は剣道に打ち込んでいて、一夏も同じように剣を学んでいた。

それまでは簡単に髪を結えた程度だったが、男女といじめられていた私を護ってくれた一夏は

” 元気を出して、箒。ワタシは知ってるよ、箒はかわいい女の子だ  
って”

そう言つて、私の涙をぬぐい、落ち込んだときは何も言わずに傍に居てくれた。ある時、私に今、しているリボンをくれ、髪を梳かしこの髪型にしてくれたのだ。

見た目は、私よりも女らしいのに、誰よりも男らしく私を護り、傍にいてくれた。もしかしたら、誰よりも私に近かったのは一夏だけだったかもしれない。

家族は、むしろ姉である 束にかかりつきりだ。姉は、自分の世界にこもっていて、他人に対して何の関心も寄せない人だった。

思い出しても、私の姉である篠ノ之 束は、私に対して姉らしいことなど何一つもしてくれなかった。

むしろ、私の人生の半分を滅茶苦茶にしてくれた。人生を滅茶苦茶にしてくれたものが”IS インフィニット・ストラス”だ。

宇宙用の強化マルチスーツであるこのISを姉が発明し、発表した事で世の中は、特に私の日常は壊れてしまった。

ISによつて、姉が重要人物になり、家族が政府の都合によりバラバラになつても、姉は知らん顔だ。

何よりも悲しかったのは、初恋の相手と言つてもいい一夏と離れ離れになつた……

一夏と離れた私に待っていたのは、あちこちを点々とする孤独と執拗とも言える政府の監視、何処に行つてもついてくる束という天才の妹と言う名のレットル。

だからこそ、願った。一夏に会いたいと……

六年間の陰鬱とした気持ちの中、私は忌々しいIS学園に入学することになったが、ここで思いがけない再会を果たした。

世界で唯一、ISを動かせる男子として織斑一夏がこの学園に入学したのだ。

私は、嬉しかった。会いたかった人にようやくめぐり合えたのだ。嬉しくないはずがない。

一夏は、綺麗になっていた。かつこよくではなく綺麗にだ……

目付きは、格段に鋭くなっていたが、本質的には、あの頃のままだった。私に最初に声を掛けてくれた。

だけど、私は一夏に怒鳴り、あまつさえ差し出した手すらも拒んでしまった。本当なら、その手を取りたかったのに……

この六年の間で私は、ひどい人間になってしまったのだろうか？一夏と一緒に学んだ剣道だって…もはや、一夏に見せられるものではないのだから……

これから、どうしようか？一夏は私を嫌いにならないだろうか？こんなことで悩んでしまう人付き合いの苦手な自分がいつものように嫌になった。

自身に対して苛立ちを覚える筈は、ふと視線を感じ、その先を見た。その先には、いつの間にか教室に戻ってきた一夏が目元に笑みを作っ  
ていてくれた。

”大丈夫、気にしていないから”

と言わんばかりに……

自分を気にかけてくれる一夏に対して、再び気恥ずかしさから頬を赤くしてそっぽを向いてしまう筈だった。

IS学園は、ISという兵器を扱う、開発する者達を育成する機関であるために始業式から授業が始まる。

「であるからにして、ISの基本的な運用には現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合、刑法によって罰せられ……」

ISの力は、国家の象徴。故にこの学園にくるのは、エリート中のエリートである。

一夏は、五冊の教科書を開きノートを取っていた。

(……話には聞いていたけど、ISイコール”国家の力”。誰もが手軽に使えるわけではないか……)

世間話程度には、ISの事は知っていたが、ここまで慎重な扱いを求めるとは始めて知った。世の中には、ISが使えるからといって女は偉いという風潮があるが、そんなことはない。

ISの力は、個人の意思だけではなく所属する国家の意思をも必要とするのだ。

「……今のところで、分からない人はいますか？」

ここで山田先生こと山田真耶がクラス中に分からないところがないか問いかけた。

「織斑君は、どこか分からないところはありますか？」

「いえ、今の所は大丈夫です。ただ、ISの運用に関してですけど、国家代表は自身の専用機を持っていますけど、自分の意思で自由にいつ何処でも使えるわけではないんですね」

一夏の言葉に、真耶は

「はい。確かに国家代表は自身の専用機は持っていますが、それを扱うには国家の認証が必要です。織斑君の言うようにいつでも使えるわけではないですね」

「そうですか。大丈夫です、そのまま続けてください」

一夏は納得したように頷き、真耶は再び授業に戻った。そんな一夏に視線を向ける金髪の少女が居た。

授業が終わり、再び廊下には一夏を見ようと学園中の女子が押しかけていた。

唯一の男性のIS操縦者がよほど珍しいのだろう。

一夏は、それらの視線を気にすることなく次の授業の準備をしていた。予め予習はしていたので、ついていける。

暇があれば勉強をしている傍ら……

”おい、一夏。なんだ、この訳の分からない文字の羅列は、魔戒語にもこんなは、載っていないぞ”

”対したもんだな。棒に石を括り付けて獣を叩いていた人間が、よくもここまで……”

”IS委員会？番犬所みたいなものか？”

腕輪だった頃のヴリルがやたら騒いでいたが、ひたすら集中して無視した。

そのためか、一夏はIS学園の模試問題では8割方は正解をしていたのだった。実際、こちらでの試験も受けており、五番内には居たのは、一夏とその姉のみが知る。

「ちょっと、よろしくて？」

授業中に一夏に視線を向けていた特徴的な髪型をした金髪の白人の少女が前に居た。

少女の名は、セシリア・オルコット。

一夏

「ちょっと、よろしくて？」

私に声をかけてきたのは、確かイギリスの代表候補生 セシリア・オルコット。

「……何か？」

無難ではあるが、そう返した。自慢ではないが、無愛想な人間が多い魔戒騎士の中では私は、人当たりがいいらしい。

「んまあっ！?!なんて、目つきの悪さ。ワタクシが声を掛けたん

ですよ、もつとにこやかに出来ませんか？」

また言われてしまったか、姉さん、尊にも言われるこの目つきの悪さ。私は、かなり目つきが悪いようだ。

「……目つきが悪いのは、承知している。セシリア・オルコットさん」

自分でいうのもなんだが、目元に少し力が入っている。ここは、目元の力を緩めないと……

「あら、ワタクシをご存知で。下々の”男”にしては、感心な事ですわね」

優越感たっぷり私を見ている。このセシリア・オルコットの態度に、この四文字が浮かんだ。”女尊男卑”。

ISの登場により、世の中は女性中心と声高に語る傲慢な女性達が多くなっている。理由は言つまでもなく、ISが女性にしか扱えない兵器だからだ。

見知らぬ女に男が小間使いのように扱われる事は偶にだがある。私は、外見が”女”なので、特に”女尊男卑”を地で行く輩に絡まれることは皆無だが……

魔戒騎士達からは、ISに関しては評判はあまりよくない。理由は言つまでもなく、ISの登場で”女”に関する”陰我”がここ十年で圧倒的に増えているのだ。

この間、私が狩った”アリマ”もそうだが、その後も”女尊男卑”

を因とした”陰我”から出現したホラーを数多く狩ってきた。

世の中は、こうだが、逆に魔戒騎士と女性の魔戒法師の連携、結びつきは、より高まっており、これまでにないくらい一緒になるものが多くなっている。

これは余談だが、学園に入学する二週間前に遠出をして閑岱まで行き、”白夜騎士”の弟子の婚姻を見てきた。

その時、白夜騎士より”一夏、お前に、愛する者はいるか？”と聞かれたが、私の愛する者。それは、女なのか、男なのかは分からない。それに私は、恋愛など分からない。

ただ、私は家族が居て、友が居るだけでも十分だと応えた。

”それがお前の戦う理由か、護りし者は内に誰よりも護りたい者の姿を想う事で、何処までも強くなれる。今度の件は大変だが、お前にとって誰よりも護りたい者が現れるかもしれない”  
そうは言っていたが、私は少なくとも目の前に居るセシリア・オルコットのような者だけは遠慮したいと思った。

「先ほどのあなたの自己紹介を聞いていたから……」

「フフン、よろしいですね。先ほども言いましたようにワタクシは、イギリスの国家代表候補生。つまり、エリートですわっ！！！！」

周りにワザと聞こえるように声を張り上げている。男としてもそうだが、女としてもあまりよい印象ではない。

「……そのエリートが、何故、私のような一介の男子生徒のところ  
に？挨拶なら、関心するよ」

「んまあ、ワタクシにそういう口をききますの？そうですわね、ワ  
タクシはこの学園を主席で合格をし、試験管をも倒したエリート中  
のエリート。あなたのように、無知で何も出来ない方にだって優し  
くしてあげますわ」

典型的な、それもかなりの”女尊男卑”の考えに固まっているらしい。  
確かにISは、女性にしか許されない力だが、それはあなただけの  
力ではないことは、分かっているだろうに……

「……………別に無理して優しくしなくてもいい」

「わざわざ、優しくしてあげたのに、何ですのっ!!?!?!その態度  
はっ!!?!?!?!」

私の反応が感に触ったのか、先ほどとは違って、激しく問い詰めて  
きた。これぐらいの反感を買うことぐらい分からないのか？

「自分の事を振り返ってみろ、セシリア・オルコット。私のお前に  
対する態度は、それ相応だ」

自分でも反感を感じているのは、よく分かる。口調もきつくなって  
いる上に目元にも力が入っている。

「何ですってっ!!?!?!」

更にヒートアップしたのか、私が用意していた教科書等を払いのけ、  
詰め寄ろうとした時、チャイムが鳴った。

「ふんっ、命拾いをしましたわね。また来ますから、逃げなくつてよ」

そう言つて、私のデスクの上から落ちた教科書を無視して自分の席に戻った。周りのクラスメイトは、私に何かを言いたそうだが、相手が相手なだけに私に味方ができないらしい。

仕方がないので、教科書を拾い、汚れを払って次の授業に集中することにした。

「何だ、あの小娘。生意気にもほどがあるぜ」

喋るなどといったヴリルが私にだけ聞こえる声で、吐き捨てたが、私はそれに応えることなく、教卓につく山田先生と姉さんが現れるのを待ったのだった。

絡まれて分かるが、アレでは魔戒騎士達がISに対して好意的ではないのが嫌というほど理解できた……

二時間目は、担任である千冬が行うものなのか、先ほどよりもクラス全体が引き締まっているようにも感じられた。

「それでは、この時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

各種装備　ISは近距離、中距離　遠距離と基本的なものがある。

軍事目的なだけに、様々な状況に対応できるようになっている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

授業の前に千冬がクラス代表者について話し始める。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会などへの出席……」

まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。

今の時点で大した差はないが競争は向上心を生む。一度決まると何か大事がない限り一年間変更はないからそのつもりで」

## 一夏

IS学園は、こうやって学園全体の士気を高めているわけか……

思うところは、はっきり言って”お祭り”と言った感じがする。ISは、最強の兵器ではあるが、その活躍場はIS委員会が運営する”競技大会”である。

各国が血筋をあげて、自国の戦力の向上のために研究を行っている。本来ならば、戦場での活躍を想定しているが、実際は最強ゆえに使い所に困っているのが現状だ。

一機で一国の軍隊をも相手取る”戦闘能力”は、まさに国家の象徴ともいえるほどの力だ。

私達、魔戒騎士にもその技術を競い合う儀式 ” サバツク ”。魔戒騎士による闘技大会である。

それは大会を運営する元老院が選んだ屈強な魔戒騎士のみが出場を許される神聖なもの。いつか、私もそこで戦ってみたいと考えている。

たしか閑岱の白夜騎士の翼さんとその弟子、暁さん、あの黄金騎士鋼牙さんと互角の実力を持つ銀牙騎士 零さんも出ていた。

「誰か、立候補をするものは居ないか？それとも推薦、他薦でもかまわないが？」

担任である姉が、クラスに聞いている。

「はいっ！！織斑君がいいと思います！！！！」

私の名前が呼ばれてしまった。表情は崩してないつもりだが、目元に力が思わず入ってしまう。

「お、織斑君。に、睨まないで」

山田先生が私を見てそんなことをいう。別に睨んではいけないのだけれど……

「……………また、目付きが悪くなったか。一夏」

ここに居るときは先生と生徒の関係なのに……………

「はいっ！！！！私もそれがいいと思いますっ！！！！！！」

次々と私を推す声がある。はっきり言って、私はそういう柄じゃない。

「……質問ですが、織斑先生。他薦はお断りできますか？」

「そんなこと、出来るわけないだろう。いい機会だ、やってみてはどうだ？織斑」

ドヤ顔で私に提案する織斑先生こと姉さん。

「候補者は、織斑 一夏。他には居ないか？自薦推薦は問わんぞ」

流れは完全に私を代表者にしようとしている。

「織斑先生。物珍しさで私を推すのは、どうかと思うのですが？」

「何だ？断るのか、この流れで断るのは、どうかとも思っぞ」

姉は私をこちら側に染めるべく色々と体験をさせようとしているようだ。

「待つてくださいつ！！納得がいきませんわっ！！！！」

私と姉の会話に割り込むように甲高い声が教室に響いた。セシリア・オルコットの声だ。

「そのような選出は認められませんっ！！大体、男がクラスに居ること自体が恥曝しですっ！！！！その上、クラス代表までっ！！！！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっし

やるのですかっ!?!」

男が恥曝し。それは、身内に男がいるだけでそれは屈辱だといった  
いのだろうか?

「実力から行けばワタクシがクラス代表になるのは当然、それを物  
珍しいからという理由で極東の猿にされては困りますっ!!ワタク  
シはこのような島国までIS技術の修練に来たのであってサーカス  
をする気は毛頭ございませんわっ!!!」

私という存在がとことん気に入らないらしい。男というだけで…私  
の女の部分で言うのもなんだが、セシリア・オルコットの意見には  
同意しかねる。

「いいですかっ!!!クラス代表は実力トップがなるべき、そして  
それは、ワタクシですわっ!!!」

クラス全体に同意を求めるように見渡すセシリア。見た所、クラス  
のほとんどがセシリアから視線を逸らしている。

代表候補生である自分こそがクラスの代表であると言えとってい  
るのだろうか?

「だいたい、このような文化的にも後進的な国で暮らすこと自体が  
屈辱で……」

「……そこまでしておけ。それ以上喋るな。耳障りだ」

セシリア・オルコットの言葉にはつきり言って嫌悪しか浮かばな  
かった。私を馬鹿にするのは別にかまわないとして、自分という存在

を絶対と思っっている傲慢な態度がはつきりって聞くに堪えなかった。

「なっ！！？男の分際でっ！！？私に意見を言うつもりですかっ！  
！?!！」

腹が立ったのか、私を指差す。

「先ほども言ったが、お前の態度を振り返ってみる。私の態度はそれ相応だ。聞くが、皆は何故、私を代表に推す？このオルコットのようにな私を見世物にするつもりか？」

オルコットに対する不快感がそのまま声に出ている。

「ち、違っよっ！！？！織斑君！！？」

「そっだよ、だって…千冬様の弟だし……」

「そ、そんなつもりはないよっ！！？！本当だよっ！！？！」

誰もセシリアに代表をやってほしくないとは表立っていえないようだ。休憩の時に、自分が態々代表候補生と宣言したことだ。

代表候補生は、ISを扱うものの中でもかなりのステータスを持っており、国家の後ろ盾もあるためにそれに対して、恐れがあるようだ。

彼女の言葉に対してクラスの大半が反感を抱いているようだが……  
…このオルコットが気づいているとは思えない。

「……みんなの言いたいことはわかった」

「まあっ、お分かりしましたか？あなたが、どういう立ち位置か？」  
私が人間ではない、猿か何かだといいたいのだろうか？

「……………オルコットにクラス代表をやってほしくないようだということが」

「何ですってっ！！！！？！！皆さんは、このワタクシにクラス代表がふさわしくないと！！！！！！ワタクシよりもこんな男、下賤で卑しい男がっ！！！！！！」

ますます不快になる。どんな人間でも此処まで言われたら……………

「お前は、男が身内、近くに居るだけでも屈辱、恥だというのは？この場には、父、兄弟がいる者だって居る。それを分かっていっているのか？」

「そうですねっ！！！！所詮男なんて、私達の必要なときに使えればそれでいいんですっ！！！！！！それ以外は必要ありませんっ！！！！！！！！！！」

女尊男卑。女が偉くて男は不必要……………ISという心のない”力”による蹂躪。心無いから、力のないものをこうやって傷つけることができるのだから……………

「そこまでにしておけ、お前のその考え方自体が自分を否定している。仮にも代表を名乗るといふのなら、もう少し周りのことを汲んだらどうだ」

「オルコットさんっ！！あなたの態度は度を過ぎています！！！！  
！！ISは女性にしか使えませんが、だからといって男性をないが  
しろにしているというわけではありません！！！！！！」

副担任の山田先生が今までにないくらいに声を張り上げた。教師として、彼女の態度が目に残ったのだろう。

「副担任は黙っていただけですっ！！？ワタクシはイギリスの代表候補生ですわっ！！！！」

「イギリス代表候補生なら、もう少し言動を考えるべきだろう。ただISの力があるだけで、全てがお前の思い通りになるわけではない」

私の言葉に更に顔を赤くして

「決闘ですわっ！！！！あなたには、躰が必要のようですわっ！！！！！！」

「思い通りにならなかつたら、最終的には”力”で押さえつけるか。それで代表になってお前と同類になるのは、我慢できん。だから……」

最終的には自分の継っている”IS”に頼るわけか。それで、私の優劣を示したいのだろう。男よりも女のほうが優れていると……

「受けてもかまわないが……勝っても私は代表はやらんぞ。お前と同類には、なりたくないからな」

「それは、あなたが負けることを前提で？」

嘲るように返してくるが、私の答えは

「いや、勝つ積もりだ。お前の”陰我”断ち切らせてもらうために……」

”陰我”という聞きなれない言葉に、セシリアが疑問符を浮かべたが私は構わずに

「織斑先生、山田先生、手間を掛けさせますが、私とオルコットの戦いの場を設けてほしいのです…できれば、三日以内に」

「三日以内って……織斑君はISを動かして間もないですし、専用機だって……」

「そうだぞ、織斑。お前がいくら強いとは言っても、さすがに三日でISで決着をつけるのは……」

私の言葉に二人はもつともな事を言うが、私には三日後に戦えるだけの準備がある。

「専用機に関しては、大丈夫です。あの人から既に渡されたから……」

私は、左手首に付けられたブレスレットを二人に見せた。これが、閑岱に行く前に篝の姉である 束さんより渡された私の専用機 蒼牙。

「一夏つ、どこでそれを……た……」

束と言いそうになった姉さんを私は、言い切る前に止めた。

「姉さん、これは束さんから渡された。だけど、ここで束さんの名前を出すのは……」

視線で箒を私は指す。察してくれたのか、姉さんはそれ以上のことは言わなかった。私の専用機に関しては、例が例なだけに対応と言うことで説明してくれた。束さんの名前を伏せて……

一ヶ月前に私を訪ねてきた束さんは、蒼牙とともにある願いを私に託した。

” いくくん。ごめんね、私が自分勝手なばかりに、迷惑を掛けて……勝手なことばかりでごめんんだけど、箒ちゃんのことをお願いできる”

” いくくと魔戒騎士の人に怒られて、初めて分かったよ。私は自分勝手に生きてきて、その付けを箒ちゃんに押し付けていたんだなって”

箒が姉である束さんを嫌っているのは分かっている。ここで嫌いなもの名前を出し、さらにはその人の妹と言うことで注目を浴びてもらいたくはない。

” 私は、箒ちゃんに合わす顔がないよ。今まで、私のせいで迷惑を掛けて、嫌な思いばかりをさせてきたから……”

三日後の放課後に、一組のクラス代表を決める代表戦がアリーナで行われることが決まった。

織斑一夏は、勝っても代表になるつもりはないようだ……

## 第貳話「セシリア・オルコット」（後書き）

やってしまいましたセシリア・オルコットさん。

アンチと言うわけではないですが、今は敵対すると言うことでこんな風になってしまいました。彼女にある陰我を断ち切ることを一夏は宣言してしますので、悪くはなりません。

早い段階で決着を付けさせたかったのと、魔戒騎士が戦うのならと言うことで夜に近い夕方、放課後の時間帯にしました。

最近、束さんのアンチを見てましたが、おもいつき反省して落ち着いた束さんが居てもいいんじゃないかと言うことで、回想ではこんな感じです。

次回からは、代表戦の前に籌をメインにしていきます。セシリアは、その後で…

予告をいれます。

おいおい、一夏。お前も他の魔戒騎士の例にもれないな……

やっぱり、互いがぶつかりあわないとお互いを理解できんのかね……

次回！花の鎖

六年振りの試合の前に、少しだけ昔話をしようか……

## 第参話「花の鎖」(前書き)

GAROの第二期が始まりました。さつそく見ましたが、相変わらずダークな世界観。深夜放送だからこそ、できるものだなと……

今回のホラーのデザインは個人的にはつぼでした。

さて、こちらもがんばらなくてはと思い、第参話を投稿します。

PVが一万件以上、ユニークが2千件を超えました。

それと、感想ありがとうございました!!!!!!

## 第参話「花の鎖」

放課後、一夏は教室で先ほどの授業の復習をしていた。IS関係の授業は、予習をしただけに何とかついていけるが、これ以上に理解を深めなければならないので、復習は大切だ。

「一夏、授業つてのは意外と面白いもんだな。ああやって、人間は学んだな」

一夏に最も近い存在 魔導具 ヴリルは本日の授業を一通り聞いていた。

「私たちが生まれる前から居て知識は豊富な癖して、授業が面白いのか？」

てつきり、退屈をしているかと一夏は思っていた。

「ああ、俺達のような魔導具は、魔戒騎士のパートナーとして居るんだけど、こんな風にごこのお嬢ちゃん達の授業を聞くのは初めてだな」

言われてみれば、学生生活というのを魔導具が体験するなど皆無に等しい。学園で魔戒騎士がこんな風に授業を受け、魔導具が傍らでそれを聞くなど今までに前例がないのだ。ましてや、男性にしかない魔戒騎士が女子高などに居ることは……

「お前も物好きだね、ヴリル。学んで、どう役立てるつもりだ？」

「それは、特に考えてないな。まあ、貴重な体験だ。思いつきり楽

「しませてもらうつもりだ」

ヴリルの言葉に一夏は、半ば呆れながらも復習を続ける。そんな一夏達に訪れる二人の女性が

「あ、織斑君。まだ教室に残っていたんですか」

山田 真耶である。少し遅れた千冬が続く。

「はい、まだ寮の部屋が決まっていないので、こちらで復習をしていたところです」

「そうですか……寮の部屋は、寮長室です」

「そうだ、私と同室だ」

千冬が真耶に続くように応える。

「お前を他の女子と相部屋と言う意見があったのだが、お前の”身体”のこともある。同室にはできん」

「織斑先生？織斑君の身体のことって？」

「そのことだが、山田君。織斑は、事故で誰にも見せたくない傷がある。それを見せるのは、織斑自身も嫌がっているな」

一夏は、男でも女でもある中性、IS”インターセックス”である。ISを動かしたのは、この体質が原因と言われている。

この事は、一夏が男性のIS操縦者である事を事実としている今、

一夏が女であることは色々都合が悪いため、秘密事項になっている。

「……はい、それを聞いて安心しました、ですが教師と一緒にいたのは、色々とまずいことがあるんじゃないか、例えば、生徒に見られたらいけないものとか……」

「ああ、そのことだが、お前なら安心だ。お前は口が堅いし、べらべらと喋るほどの社交性もないしな」

余計なお世話だと一夏は思った。思わず睨みたくなった。

「睨むな、一夏。まったく、どうしてお前は…昔はもっと優しい目をしていたのに」

先生から姉が変わってしまった。事あるごとに目付きの悪さを嘆く姉に一夏は内心、うんざりしていた。

「……目付きの悪さはいいでしょう。今日、箒にもオルコットにも言われていますから……」

「そこだけは、私に似ていないのに……」

(いえ、先輩。織斑君の目付きの悪さはどうみても先輩似です)

二人が並ぶとよく分かる。双子と言えるぐらいに二人の容姿は瓜二つだ。違いは背は若干一夏が高く、肩幅はほぼ同じ程度。声は千冬のはスキーンな声と比べると一夏のほうがより女らしい声である。

「どうでもいいですが、姉さん。そんなことを態々、言いに来たの

ではないのでしょうか？」

「どうでもいいだと……この事は、後で話すとして、お前の専用機だが……」

「そうでしたっ！！！織斑君！！！その専用機はいつ、誰に渡されたんですか！！?!?!」

「あの場では、伏せていたが、篠乃之 東博士、東さんからだ」

「ええっ?!?!篠乃之博士がですが?!?!」

驚きの声を上げる真耶とは対照的に千冬は落ち着いた感じである。

「……一夏。いつ、渡された？あいつは、どういう訳か、私からも連絡が取れなくなっている、今、何をやっているのだ？」

長年の付き合いである千冬ですら、行方が分からなくなり、連絡さえつかなくなった親友が何故、一夏を尋ね、さらに専用のISまで与えたのか？

一夏の脳裏に、一ヶ月前に尋ねてきた束の姿が浮かんだ。かつては、髪をピンクに染め、カラーコンタクトをし、派手な格好をしていたが、会ったときは髪を黒くし、カラーコンタクトを外し、質素なシスターの服を着ていた。

彼女を古くから知るものからみると、その姿は別人そのものだった。

” いったくん、どうかな？この格好…… ”

” いくくん、私は今までのことを振り返ってみたら、碌な事をしてないよね。お父さんとお母さんには、恩を仇で返すみたいに生活を滅茶苦茶にして…作ったものは、魔戒騎士さん達にも迷惑を…男の人達にも恨まれることを”

” 私はしばらくISは作らないよ。だけど、この子だけは特別…。いくくんは、護りし者だから、絶対に政府やIS委員会の思い通りにはならないで……”

” これをちいちゃんに渡しておいて、これさえ、あればいくくんをみんなが如何こうするなんてできないよ”

私は特に何も言わなかったが、あの人はまるで自分の罪を悔いている罪人のようだった。確かに東さんは、ISを作り女尊男卑の世界を招いた。

だけど、それが自分勝手な世界を作ろうと言う願望ではないことを私は知っている。ただ、私達にとって幸せな世界を作り上げようとしたのだ、それがあまりにも強引過ぎた。ただそれだけだ。

そのために、様々なものを壊し、気づかずに居て、それによつやく気づいただけ……

一年前のホラー遭遇と魔戒騎士との出会い。これが、東さんの心を変えたのだ。何よりもこの人が一番悔いているのは…

”ごめんね、篝ちゃん。私が自分勝手なばかりに、篝ちゃんの人生をめちゃくちゃにして……”

「……私からは、何も言えない。ただ、東さんの事は、あまり詮索しないでほしい。あの人には、まだ時間が必要なだから」

「……そうか、それで渡されたままではないのだろう。動かしたのか？」

「はい、初期化と最適処理化は済ませている。これは確かに、私の専用機だ」

左手首のブレスレットに視線を向けた。これは、あの人の願いだろう。

「なるほど、それで準備は整ったと言っていたのか、まったくお前は、私の目の届かないところで、何をやっとするんだ？」

呆れ顔の姉さんと話がついていけない山田先生を見つつ、私は、苦笑いを浮かべるしかできなかった。

## 一夏

その後、姉さんに束さんからの手紙を渡しておいた。あれは、私の処遇に関して製作者の意向が書かれている。

イレギュラーな対応だけに私を調査するために、専用機を渡し、そのデータを取るために様子を見ると言うことである。

そのため、IS委員会を始め、各国の干渉および、何処にも所属はさせないという、無理にでも干渉、所属をさせた場合は、各国のISを使い物にならなくすると。

姉さんと違い、束さんは、私が魔戒騎士であることに抵抗を感じていない。むしろ認めてくれている。

私が魔戒騎士として不自由を掛けないように、手を回してくれるのはありがたい。

「しかし、あの嬢ちゃんが束さんの妹だったのか？性格は似てないが、根本的な所はそっくりだぜ」

寮の部屋に向かう途中で、ヴリルが話しかけてくる。

言われてみれば、そうかもしれない。あの二人は、性格こそは正反対だが、根本的にはよく似ている。

特に人付き合いに関しては、とことん苦手なのだ。

「一夏、束さんは、何故、箒のお嬢ちゃんに会いに行ってやらない？このままだと、根本的な解決にはならんだろう」

「確かにね…だけど、それだけに束さんは、自分のせいで箒を苦しめていたことに悔いているんだよ。踏み込めないのは、まだ決心がついていないんだから……」

「ったく、人間の心つてのは、色々ややこしいんだな。俺は、もっとシンプルに気持ちを伝えてほしいところだ」

「……それができたら、人間は苦労しないよ」

古くから人間を知っている魔道具達から見たら、私達人間は自分で自分を拘束しているようなものなのだろうか？

「そっぴゃ、束さんだけじゃなくて、お前も箒のお嬢ちゃんに声を掛けられた場所に居たのに、それをしないで去ったよな」

ヴリルの言葉に、私も人のことは言えないと思った。箒も知らなかっただろう、半年前に”ホラー”に狙われていたことを……

半年前

人間が立ち入る事のできない異界に彼らは居た。

「 を南へ向かわせます」

「何故、我々の管轄ではない場所に、 を？」

声は、一つの空間から複数に聞こえる。どれも男性の声である。

「 は、これまでの魔戒騎士よりも格段に若く、成長が早い。故に多くの試練を積ませなければならない」

「 一体でも多くのホラーを狩る。ホラーとの戦いの一つ一つが魔戒騎士にとっての試練なのだ」

「 故に、 は、多くの戦いを経験することで、屈強の魔戒騎士へと至る」

「あのIsと言うモノのおかげで魔戒騎士も魔戒法師も人出がいくらあっても足りない。優秀な魔戒騎士は、多くほしい」

## 南の管轄

「しかし、一夏。お前も随分とお人よしだな、見ず知らずの奴の尻拭いなんてな……」

「うるさいぞ、例え尻拭いでもホラーは狩らなければならない」

「そうだったな。相変わらず生真面目な奴だ。それにしても管轄外のところは俺達を送るとは、何を考えているのかね？」

腕輪のヴリルは、相棒の一夏に苦笑する。一夏は、今、普段の管轄区域から離れた町に来ていた。本来は、西の管轄であるが。

理由は、昨日ホラーが”陰我”のあるオブジエから現れ、それをこの管轄の魔戒法師が討伐に赴いたのだが、返り討ちで重傷を負ってしまった。

本日、番犬所から南の管轄へ赴き、ホラーを狩れと言う指令が出たのだ。本来なら南の魔戒騎士が行えばいいのだが、西の魔戒騎士の一夏に白羽の矢が立った。

理由は、一夏に多くのホラーを狩らせ、その成長を促そうと言うもの。これまでの魔戒騎士の中では最年少の一夏に寄せられる期待はそれなりに大きい。だが、一夏はそれをあまり気にしていない。

「話に聞くと、現れた奴は、非常に凶暴だというけど、心当たりは

ある？」

「ああ、やられた法師の傷と”号竜”の壊された具合から察すると、”ヴレイド”と見て間違いないな」

ヴリルが、ホラー”ヴレイド”について語る。

「奴は、人間の”怒り”を感じて、それに憑依する」

「……怒りに……」

「奴は、本能の赴くままに”怒り”を持つ人間を探し、それを食らう。頭のイッチまった奴だ」

濃い青のコートを揺らめかせながら、一夏は昨日、剣道の全国大会が行われた武道館へと足を踏み入れた。

「ヴリル。ホラーは此処から現れて、誰に憑依した？」

「ここで悔し涙をした学生の思念を感じる。決勝戦で、そいつに負けて、激しい怒りを持っていたようだな」



「……ここで憑依し、何人も喰らったようだ。まったく、何て奴だ」  
ヴリルの言葉に一夏も同意する。いつもながら、ホラーの行動には怒りの念を感じる。だが、今回の相手はその”怒り”感じて取り付くのだ。

何もいえなくなるが、やはり、怒りを感じずには居られない。

「……ヴリル、そのまま何処に？」

「此処を出てから、入り口で魔戒法師と交戦。そのまま行っちゃった様だ。今晚、現れる。たぶん、取り付かれた奴が”怒り”を感じた人間のすぐそばに……」

一夏はすぐに、先日の予定を確認する。昨日はここで、剣道の全国大会の決勝戦が行われた。その決勝戦の対戦表には……

篠乃之 篇      西川 美登里

「……篇……」

まさか、こんな所で六年前に分かれた幼馴染の名前を聞くとは思わなかった一夏は、思わず声を上げてしまった。

「なんだ、一夏。知り合いか？」

「……私の幼馴染だ。まさか、ホラーが憑依したのは？」

「ああ、お前の幼馴染に負けたお嬢ちゃんに憑依した。お前の幼馴染を喰うつもりだ」

ヴリルの言葉に一夏は、今、筈が通っているであろう学校へと急ぐ。今の時刻は、午後五時半過ぎを回っていた。

中学 剣道部 道場

時刻は既に六時半を過ぎ、ほとんどの部員達が後片付けを始めている。

「篠乃之さんは、もう帰ったの？」

「ええ、あの子はいつもそうよ。用が済んだら、挨拶もなしに出て行くわ」

「天才の妹って言うから、もっと凄いと思ってたんだけど……」

「さあ、あれも一種の天才じゃないの？」

何気ない会話をしているが、ここで名前の挙がっている篠乃之に対して、あまり評価は良くないようだ。

「それでも、全国大会優勝だもの……結果だけを見れば、大したものよ」

一人の剣道部員に同意するように他の部員も同意を示すように、額く。時刻は夏の夕暮れ、少しずつではあるが夜の闇を迎えようとしていた。

夜の影に追従するように、一人の剣道着を着た少女が道場に近づく。その少女の目に一瞬だけ、“魔界文字”が浮かび上がり、つられるように口元が釣り上がった。

いつものことだ。誰も私のことなど気にかけてはいない。いや、私の日頃の行いが悪いからだろう……

六年前、姉が政府から重要人物として指定され、私は育った町を離れ、こつやつて転々としてきた。

そこには、味方なんて誰も居ない。いつもあるのは、あの姉の妹と言う肩書きと政府の監視だけ……

もし叶うのなら、姉がISなど作らずに、誰にも迷惑をかけないように世界を巻き戻してほしい。

願わくば、私が好きだった初恋の人の居るあの場所へ私を帰してほしい。

いつも縋るのは、今、手元に持っている六年前に一夏が私にくれた”花のブレスレット”

六年も経つのだが、これを枯らしたくなかった私は押し花のようにして栞として使っている。これだけが、私と一夏を繋いでくれるもののようにがして……

一夏は、男の癖に花が好きで奴だった。あさがお、ひまわり、あじさい、ゆり、桜などとあいつの隣にはいつも花があったような気がした。

最初に出会った頃は、私よりもかわいい女の子かと思ったが、あい

っは男だった。花が好きと知ったときは軟弱者とも言った。

” 箒は、どうして、花が嫌いなの ”

” こんな、軟弱なものの何処がいいのだ？ 竹刀で叩けばそれで散るだろう ”

” そうかな。ワタシは箒のそっちのほうの方が弱く思えるよ ”

” なんだとっ！?! ”

” だって、花はこうやって限られているけど、どんな場所にでもがんばって咲けるんだよ。がんばっている花を ” 力 ” が強いからって散らすほうの方が弱く思えるんだ ”

幼い頃の私は、今と変わらない餓鬼だった。一夏は、私よりもずっと強かった。育てた花を千冬さんや私に見せていた。そのたびに私は、 ” 軟弱なものを ” と言っていた。

分かれる間に、一夏が編んでくれた花のブレスレットは、私と一夏を繋ぐ唯一のものとしか思えなかった。この ” 花の鎖 ” だけが…

……  
だから、私は好きだった人の名を呼ぶ。今は、遠く離れてしまった幼馴染の名を……

「……………一夏……………寂しい……………」

顔を伏せて、下校する箒を一夏は、物陰から見ていた。ホラーが狙うであろう彼女のすぐ傍まで来ていたのだ。

すぐにでも声を掛けたい。だけど、今、声を掛けたら……

「一夏。ホラーは、あの嬢ちゃんじゃなくて、学校のほうに出たみたいだ」

「……わかった。少なくとも箒には危険はない。それでよしとする」  
寂しそうな箒の背中を後にして、一夏はホラーが現れた学校へと足を向けたのだった。

箒

「……一夏？」

すぐ傍に、懐かしい感じがした。それは、私が焦がれていた一夏と同じ。

「……まさかな。居るわけがないものな」

夜が近づいてきたのか、近くの街灯に明かりがとまり始めた……

中学 剣道部 道場

突如現れた訪問者は、突然、剣道の試合を申し込んできた。

「試合をしましょう」

「ちょっと、今はもう練習時間も終わっているのよ。そういうことは、事前に……」

いきなり、妙なことを言い出した訪問者 西川に対して剣道部員は

断りを入れたのだが：突然、部員は倒れてしまった。

倒れた部員から、夥しい血が道場の床に広がり始めた……

「いやあああつ！……！」

「……何を騒いでいるの？お前達の剣はこういうものではないのか？」

その言葉とともに大きく飛翔し、手に持っていた竹刀で近くの部員めがけて切りかかったと同時にまるで、真剣のようにざっくりと切られてしまった。

血が飛び散り、部員達は恐怖に駆られ、我さきへと道場から逃げ出す。

「………あいつは、いない？まあいいわ………少しだけ、憂さ晴らしの相手になってもらいましようか？」

ニヤリと笑ったと同時に、目に魔界文字が浮かぶ。もはや剣道を嗜んでいた少女の姿はなく、それは、まさしくホラーであった。

ホラーは、すぐ近くで足を絡ませ、倒れてしまった数人の少女達に視線を向け、すぐに足を進めた。

恐ろしいものがすぐ近くまで迫っている恐怖感で、少女達は逃げ出すことができない。

「いや、いやっ！……！こないでっ！……！」

近くに落ちてあった竹刀を投げつけるが、まるで効果がない。あと二歩、三歩という所まで来たときだった。

「そこまでしてもらおうか……試合が不本意で、怒りを覚えるものだったとしても、それを理由に八つ当たりをしていいわけではない」

ここにホラーを狩るもの 魔戒騎士 織斑一夏が立った。

「……誰？織斑千冬？」

暗がりではあるが、その顔はあの織斑千冬に瓜二つのものだった。

「……すまないが、人違いだ」

と同時に、ホラーめがけて矢を三本纏めて放った。放った矢に対して、ホラーは鬱陶しそうに叩き落す。

「……………逃げろっ」

怯える少女たちに視線を向け、この場から去るように一夏は促した。

ホラーは、逃げる少女達に目を向けるが、間合いに踏み込んできた一夏の斬撃に対応すべく、その腕を鉋状の物に変えて迎え撃つ。

一夏は、斬撃を防がれ、さらに魔戒弓の刃が挟まれたことに対し、これを解除するために一旦、魔戒弓を手放し、大きく飛翔し、頭部めがけて強烈な二段蹴りを浴びせた。

「っ!!?!?!?!」





ヴレイドの姿が消滅したと同時に、鎧が解除され、一夏はヴレイドが消滅した場所のとある一点を見つめていた。

「く、悔しい……なんで、あんな奴に……どうして、あたしが……」

下半身を失い、まるで壊れたガラス細工のような姿をした西川 美登里の成れの果てがあった。まだ、怒りが収まらないのか、その目には憤怒の色が浮かんでいる。

「……私からは、何も言えない。だけど、お前がホラーに取り付かれた時点で、もうこれ以外にできることはなかった」

「なら、あんた。……あいつを一回負かしてよ。そしたら、私、満足するから……」

苦し紛れの台詞なのか、そのまま次の言葉を言うことなく崩れ、消えていった。

「……善処するよ。ただ、私は幕の前では、かなり甘くなっ  
てしまっから……」

なんともやりきれない気持ちであったが、一夏はその場を後にした

……

そして、現在

「俺がこんなことを言ってもなんだが、やっぱりホラー狩りの最中に声を掛ける訳にはいかなかったもんな」

ヴリルは、少し一夏を責めるように言ってしまったことに対してフオローを入れたようだった。

「別に、ヴリルが気にすることではない」

誰の問題でもないと言うのが、一夏の考えである。篝の境遇は、周りのために酷く歪んでしまったことによる。

今まで、彼女をちゃんとみて、分かってあげられる存在が居なかったからだ。

だけど、今は……

「今は、私が近くに居る。篝に対して、何ができるかはわからないけど、一人で悩まないようにはしてあげたい……」

「……そうだな。人間ってのは、一人じゃ生きていけないっていうしな」

一夏は、自身がこれから過ごす寮へと足を踏み入れた。寮長室へ…今は、姉は居ないがこれから、三年間はここで過ごすことになる。

部屋の内装は、それなりに金を掛けているのか、ホテルよりも豪華だ。ベッドの枕元に、魔戒騎士にとって見慣れたものが目に付いた

「姐さんが一緒じゃなかったのは、良かったな」

ヴリルの言葉の通りだった。ベッドの枕元に赤い封筒が置かれている。これは番犬所からの指令書だ。

魔道火で燃やし、指令の内容を確認する。

”その地での活動については、追って連絡を行う。ゲートが開かれる気配はないが、念のため陰我のオブジェの封印を行え

番犬所からは、こちらと繋がりのあるものの協力を要請してある。その者は近々、お前達の前に現れる”

「……番犬所もここには、それなりに気にかけていたのか」

「そうだな。やれやれ、協力者つてのは、どこのどいつだ？名前ぐ

らい知らせるよ」

「ヴリル。魔戒騎士ほどじゃないけど、それなりに闇に通じている名前に心当たりはある？」

「そうだな、一番に思い浮かぶのは、更識だ。確か今の当主が国家代表だっけな」

「よく知っているね。私もつい最近までは、その辺の事情は疎かったのに……」

「俺もだ。だが、勉強した」

どこでそんな知識を仕入れてくるのかは、分からないが、こういうところは頼りになる。

「後で更識について、調べてみようか？」

「ああ、だが、骨が折れるかも知れんぞ。更識は、確か隠し名だ、堂々と名乗っているなんてことは……」

今、この場にホラーは現れては居ない。だが、用心だけは怠ってはならないと思う一夏であった。

翌日

第

分かっていただけだが、剣道部に見学に行っただがあまり好意的ではなかったな。当然だ、あんな剣道、歓迎されるはずがない。

何処で知ったかは知らないが、私が篠乃之束の妹だと誰かが言いふらしたようだ。ここでも姉に振り回されるのかと思うと嫌気が差す。

また、怒鳴ってしまった。すぐに頭に血が上りやすいのは、私の悪い癖だ。いつもながら成長をしていない。

一夏は、今どうしているだろうか？結局、あの後、一夏の顔を見るのが恥ずかしくて逃げるように出て行ってしまった。

寮に住むと思うが、何処に住むというのだろうか？誰かと相部屋になるのか、もし来るのなら、私と一緒に……いや、男女、七日して同衾せずというではないか……

そんなことを考えていたら……

「おはよう、箒」

と、その一夏が話し掛けてきた。

「い、一夏っ!?!」

すこしデジャブを感じる光景に箒は、自分は相変わらず成長していないと思った。昨日もこんな風にやり取りをしていたのではと……

「お、お前、なんで、こんなところに居るっ!?!」

「何でって、私も朝食を取りにきたんだけど……」

昨日から思っていたが、一夏はオーバーな対応の箒に対して苦笑するしかなかった。

「な、何を笑う。一夏っ」

「いや、相変わらずだなんて……成長していないってわけじゃなくて、私の知っている箒なんだなんて」

一夏の言葉に箒は、

「なんだ、そういうお前だって……変わっていないぞ」

「……そうかな」

何処かほにかむ様に笑う一夏は、少し照れているように見えた筈であつた。

「せっかくだから、一緒に朝食を取ろうか？」

「……ああ、別にかまわん」

筈

何故、一夏はこうも私の虚をつく形で現れるのだろうか？普通に言葉を返したいのだが、何故か喧嘩腰になつてしまふ。

こんな自分がものすごく嫌になる。もう少し、愛想よくできれば…  
…普通の女子高生らしく…もっと…普通に…

今、朝食を二人並んで取っているが、一夏とは会話は無い。一夏も私に気を使っているのだろうか？

昔から、そつだ。一夏は、あの姉と違い必要以上に構うことはなかった。私の事を少し離れて見守ってくれと言った感じだった。

気になることといえば、明日には一夏は”クラス代表戦”をあのセシリア・オルコットと行うというが、大丈夫なのだろうか？

「一夏、お前は明日、ISでセシリアと戦うと言うが、大丈夫なのか？お前は、ISに触れて間もないだろう」

「私にも私なりの意地がある。少なくとも、ああいう輩には負けたくはないし、好き勝手には言われるのは不愉快だ」

少しだけ、一夏の口調がきつくなった。一夏は、こうだった。私が”男女”と虐められた時、いつも助けてくれた。男なのに”私”という奴で、私よりも虐められそうだったのに

誰かを心無い暴力で傷つけられるのが我慢できないのだろうか、一夏は……

女尊男卑もある意味、心無い力による抑圧だ。姉が作ったアレのせいでセシリアのような考えがまかり通っている。

私も一度、負けてしまえばと思う。男に……一夏ならと思うが、ISの国家代表候補生となると、付け焼刃程度の技術では対抗が難しい。

「なあ、一夏。私がISを見てやるうか？お前は、私達、”女子”と違い、ISには、あまり触れていないだろう」

私にしては、うまく言えたなと思う。

「確かにね。だけど、やれることはやった。私もこの一ヶ月は、ただ遊んでいたわけじゃないから……」

そう言っつて、一夏は左手首にあるブレスレットに目をやった。あれが一夏の専用機らしい。昨日の件では、驚いたが、なにより嬉しかったのは、一夏が私を気遣ってくれたことだ。

一夏の専用機は、間違いなく姉が渡したものだ。あそこで、姉の名前を出さなくてくれたのは、ありがたかった。

「そうか……なら、それだけのことをいうのなら、私にその”実力”を見せてくれ。同門としては、お前が負けるのは恥ずかしい」

駄目だ。これでは、威圧的ではないかと思う。もっと柔らかく言えない物かと……

「そうだね。箒は、実際に目で確認しないと納得してくれないよね。分かった、じゃあ、放課後に久しぶりに試合でもどうかな？」

一夏からの試合の誘いだった。正直、あの剣道は一夏には見せたくなかったが、相手が一夏ならば、あんな暴力的な剣は振るわないかもしれない。

一夏と離れ離れになったことによる苛立ちで私は憂さ晴らしの暴力に走ってしまったのだ。

でも、一夏ならば……私は、私の望む剣を振るえるかもしれない。何より、私は一夏と一緒にいたい。

「ああ、その試合受けてたとうではないか」

なあ、一夏。お前は今でも、花は好きか？好きならば、私達の”花の鎖”は決して途切れてはいないよな……………

私達は、これからは、ずっと一緒にいられるよな？

”泣かないで、篤。また、いつか会えるから”

”いつかって、いつだ？わたしは、これから遠くへ行くんだぞ。もう会えないかもしれないじゃないか”

”ううん、そんなことはないよ。ワタシ達ははなればなれになるかもしれないけど、いつかまた、会える日がくるよ、だから、これを”

幼い日に私の右手に結ばれた花で編まれたブレスレット。これは、私と一夏のいつかの再会を願って作られたもの…………



## 第参話「花の鎖」(後書き)

今までで、一番長かったかも……………

箒さんのイベントとして、あと 魔戒騎士としての一夏を書きたかったので 回想で戦ってもらいました。

やっぱり、難しいものですね。ヒロインを固定しようかと悩み始めましたが、一通り全員を出した後にしたほうがいいのか悩んでいます。

今の時点では、箒です。今回で、箒をデレさせたかったのですが、まあ、仕方がありません。次回に持ち越ししましょう。実を言えば、ここで剣道を行おうと思ったのですが、

次回も箒がメインで話が進みます。

この作品の一夏の声のイメージは、川澄綾子さんかなと思ってたり、どうですかね？ fateのセイバー役で有名です。予告を言っておきます。どうぞ…

さて、試合の前の昔話も終わった。

そろそろ本番と行くか？二人とも、思う存分にやれ、ただし相手を想ってな

次回！「篠乃之 箒」

もう無理はしなくていい、甘えたいなら、甘えればいいさ。今まで辛かった分だけ……………



#### 第四話「篠乃之尊」(前書き)

こんにちは、NAV AHOです。

最新話ができましたので、掲載します。

G A R R O第二話を見ました。鋼牙とカオルを久しぶりに見れてよかった。

それにしてもあの魔戒魚：結局カオルで落ち着いたんですか(笑)

前回の奴と違い、今回のホラーは業が深いなと思うයි。

女のホラーは、生々しすぎます。

そして、皆様。感想、ありがとうございました!!!!!!

それでは、どうぞ!!!!!!

#### 第四話「篠乃之箒」

一夏と箒は、午前の授業を終え昼食を取っていた。授業では、本格的にクラス代表戦が明日の放課後に決定した事が伝えられた。

「なあ、一夏。本当に大丈夫なのか？あのオルコットは、あれでも代表候補生だぞ。本当に勝つつもりか？」

箒が一夏に対して、クラス代表戦の事を聞く。今朝も似たようなやり取りをしていたが、

「今朝も言ったよ、箒。私にも意地がある。ああいう輩には、負けたくはない。力で抑えられるのは不愉快だからね」

一夏は、今朝と同じように応える。箒は思う。この幼馴染は今時の”女尊男卑”の世界で、よくまあこんな風に堂々と構えていられると……

(まあ、その外見では、女に絡まれることはないか……)

箒は、一夏を見る。幼い頃から、女のようにであったが、今もまさに”女”そのものだ。姉である千冬に瓜二つだ。

「……箒。何か、私に失礼なことを考えなかった？」

「な、何を言っているっ！?!?!一夏、お前も男ならば、その長い髪と華奢な身体は何かならんのかっ！?!?!」

”そういう事を考えてたか” と言う具合に一夏は、箒が自分に対して思っていることを察した。

「別にどういふ外見をしようとは、関係はないよ。ただ、女っぽいからと言って髪を切るのは、それを認める事になる」

箒は、知らないが一夏は女でもあるのだ。女でもある故にそれなりに髪のご事は気にしている。

「……お前も自分の外見は承知しているのか」

一夏は、自分が女でもあるので、特に箒に返す言葉はなかった。この時、少しだけ、一夏が睨んだように見えたのは箒の錯覚だっただろうか？

「ねえ、あなたが噂の子？」

見たところ、上級生のようだ。1人ではなく、2、3人連れている。上級生は、一夏に注目している。

「本当に織斑先生に似ているわね」

人と会う度にこう言われる。魔戒騎士として活動している時にも姉の千冬と間違えられたことがあった。

「ねえ、代表候補生と明日、クラス代表を掛けて戦うって本当？」

「……別に賭けて戦うわけじゃない。ただ、私は勝って、オルコットのよきな輩と同じになるのは、嫌なだけだ」

一夏は、勝つてもクラス代表にはならないようだ。負けるつもりは無いらしい。

「本気で言っているの？男が強かったのは、昔のことだよ」

ISが女性にもたらされた事により、男女間のバランスが崩れ、男と女で戦争をしたら三日で男は負けると言われている。

半ば失笑しているような上級生に対して、一夏は気にすることなく

「それは、ISがあることが前提の話だ。ISが無ければ五分ぐらいにはなる。それに……………」

一夏の脳裏には、自身が憧れる魔戒騎士達の姿があった。彼らなら、ISを装備した者達が相手でも負けることは無いだろう。

「以前の男尊女卑をやっていたことの仕返しをISの力で、無理やり押さえつけて、それを”強い”と勘違いしている、先輩方の助けはいらない」

「ちょっと、あなたっ！！いくらなんでも失礼じゃないのっ！！！！」

上級生は、一夏の態度に声を荒げた。理由は親切心で接したあげたのにそれをこのような反抗的な態度で返されるなど思いもよらなかったからだ。

「……………私にとっては、さっきの先輩の方が失礼だ」

一夏も分かっているが、ISの力「強い」と言う考えに反感を持っている。強いと言うことは、力ではなく、もっと別の意味を持っていることを知っているからだ。

「分かったわよっ！！！無様に負けても知らないからねっ！！！！」

ご立腹な態度で上級生は去っていった。一夏は何事の無かったようにお茶に手を伸ばした。

「おい、一夏。いくらなんでも、あれは言い過ぎではないか？」

先ほどのやり取りを見ていた箒が一夏に問いかける。

「……………それでもない。私は”強さ”と言うものをあんな風に言われるのが我慢ならなかっただけだ」

”だから言ってやった”と言わんばかりの一夏に内心箒は、自分の心に陰が差すのを感じた……………

箒

この六年間で一夏に何があったというのだ？先ほどの一夏は、私と

は違う遠くを見ているように見えた。

その華奢な外見からは思えないほどの”強さ”を感じる。何故だ、何故お前は、そこまで強くなれたのだ？

昨日もオルコットに対して一歩も引かなかった。それと比べれば私は弱い。昨日もオルコットが一夏の事を罵倒したときも擁護できなかった。

理由は明白だ。私がオルコットの”力”に恐れをなしたからだ。I Sの代表候補生となると私達の同じ年代の者達よりも”力”がある。その代表候補生に一夏は、臆することなく勝負を受け、それに勝つと言った。

”勝つ積もりだ。お前の”陰我”断ち切らせてもらうために”

私も聞きなれない”陰我”と言う言葉、オルコットの何を断ち切ろうと言うのだ？クラス代表など、問題ではないほどのものをお前は見ているのか？

今、お前が見ているものが何なのかは知らぬが、放課後の試合で見せてもらうぞ、一夏。

## 放課後

一夏と箒は、ともに剣道着を着て剣道部の道場に来ていた。

一夏自身、胴着を着るのは久しぶりではあるが、それを感じさせることの無い落ち着きを持っている。

その様子に箒は、

「一夏、随分と様になっているな。あれからも剣道は続けていたのか？」

「……まあ、剣自体は続けているよ」

返ってきた返事に対して、箒は剣道を続けていたと解釈したのか

「そうか、お前も続けていたのだな」

少しだけ上機嫌に防具を身に付けていく。歓喜にも似た気分に水を差すような言葉が箒の耳に入った。

”篠乃之さんよ。ここで試合をするんですって、織斑君と”

”えっ！？！織斑君、大丈夫かな？怪我とかしないかな？”

”千冬様の弟だから、大丈夫じゃないの？でも、篠乃之さんって、

相手をただ叩きのめすだけで有名だし”

いつのまにかギャラリーができていたのだが、その中には剣道部の部員の姿もあった。

箒

自分の評判が悪いことは理解している。分かりきっているのだが、それでも……辛い……

でも、一夏となら自分はあるな剣道はしない。一夏となら……絶対に……

二人は向かい合い、礼をし互いに剣を構えた。

先に動いたのは、箒だった。先手必勝と言わんばかりに突きを行う

が、一夏はそれを防ぎ、カウンターを返した。

返された一撃はそのまま箒を吹き飛ばしてしまった。

「うわっ!?!」

受身を取れずに箒は、道場の床に転がってしまふ。腰に痛みを感じつつも一夏を見ると、そこには何事も無かったように立つ姿があった。

「織斑君って…こんなに強かったの？」

「………凄い。息一つ、切らしてないよ」

私は、一体何があったのか分からなかった。先手必勝で突きを繰り出したと同時に一夏がそれを防いだと同時に私は衝撃を受け吹き飛ばされてしまった。

一体、何だと言うのだ。

何度、一夏に竹刀を打ち込んだだろうか？一撃をまったく与えられない。競り合っても弾かれ、一本を取られる。

かつては一夏は私よりも強かった。でも私は、別れてからも剣を続けていた。そのおかげで全国大会で優勝できたのに、この差は何だ？

私は竹刀を取り、一夏に向かっていった。

「やあああああああつ！！！！！！！！」

叫びを上げ、竹刀を振りかぶった。振り落とされた竹刀を一夏は、何事も無く防ぎ、再び私は一本を取られた。

「……第。ただ、打ち込むだけでは、私に一撃は与えられない。もつと護りに気を配って……」

一夏は、私に何かを言っている。何をいうのだ、何事も攻めなければならぬ。攻撃こそ最大の防御ではないか。

「一夏つ、攻撃こそ最大の防御だ！！！！」

突きを可能な限り私は放った。それを、あいつは何事も無いように

避け、鋭い踏み込みと共に鋭い一閃で一本を取られてしまった。

まただ…一夏の動きがまったく見えない。攻撃が来るのは分かるのだが、それがまったく分からないのだ。

だけど、一つだけ分かったことがある。一夏は強い。私が思う以上に遥かに強くなっていた。

それは、それで嬉しかった。だけど…

「一夏…お前も剣道は続けていると言ったな。それだけの強さを持ちながら、何故私は、お前の名前を聞かなかったのだ？」

一夏が剣道部に居たのなら、当然のことながらその強さ故に名前を聞くはずだ。だが

「確かに私は、剣は続けている。けど……中学の頃、部活動はやっていない。だから、篤が私の名前を聞かなかったのは当然だよ」

一夏は剣こそは続けていたが、剣道部そのものには入っていないかった。そのことを知ったとき、私の中で何かが切れた。

「なんだとっ！…！！お前は、自分の”力”だけで、そこまで強くなったとでもいいたいのかっ！…！！！」

私も剣の師であった父と別れ、一人で訓練を行ってきた。そしてより実践的なものを求めて剣道部に身をおいた。

一夏も条件は同じなのに、この差は……これが、もって生まれた才能と言うものなのか？あの姉と同じく、お前も”持つべき者”と

いつのか？

「私一人だけの”力”ではない。箒と分かれた後にある方の元で”剣”を学んだ。その方と、その後に出会った人達が……私を”強く”させてくれた」

その言葉は、私が思っていた以上のものだ。自分自身の力だけではない何かを、知った上での……

何なんだ、私などでは足元にも及ばない。勝負になどならないと思っただのか、私の手から自然と竹刀が離れてしまった。

一夏

”……一夏、この魔戒弓を持ってみる。そして、これを使いこなすんだ”

私は、師の言葉を思い出した。私が師と出会ったのは、小学生の頃。まだ、箒と出会う前だった。

”なんだ？お姉さんが、元気が無いって、そうだな。女は”花”が好きだ。こいつを見せてやれ”

私に花の美しさと穏やかさを教えてくれた。そして……

”……一夏。人間ってのは、自分が思う以上に弱いんだ。どんな奴でも、弱さと脆さは持っている。だから、支えあうんだ”

今なら良く分かる。箒は、確かに剣道で全国大会を制するほどの”力”を得た。だけど、それは、苦しみや悩みに振り回され、そこから逃れようと相手を打ちのめすだけのものだった。

私に負けてしまった事に対して、箒は顔をうつむかせている。昔から箒は、落ち込んでしまうと顔を俯かせてしまう。

今の箒に半年前に見た後姿が浮かぶ。あの時は、声を掛けられなかったけど……

「……箒……」

私は箒に近づき、幼い頃のようにそっと彼女を抱きしめた。

篤

「……………篤……………」

気がつくとも一夏が私を抱きしめていた。

「な、何をしているかつ！！！！？！！一夏っ！！！！？！！！！」

私は頬が自分でも真っ赤になるくらい熱くなっているのがわかる。

こいつは、幼い頃からこんな感じだった。言葉ではなく、行動で示すのだ。だからと言って、もう子供の頃とは違うんだぞ！！！！！！！！

「は、離せっ！！！！！！！！」

恥ずかしさのあまり私は、一夏から離れようと抵抗するが、一夏は私から離れようとはせず、抵抗するとより強くに私を抱きしめたのだ。

「離れたら、篤は私から逃げる。小さい頃は、嫌なことなことが遭ったら、いつもこうしてたよね」

幼いときから、私が落ち込んだり嫌なときがあったら一夏はこういう風に私を抱きしめてくれた。

両親が姉に掛かりつきりで、私は甘えたいときに甘えることができなかった。唯一、甘えることができたのは一夏だけ……

恥ずかしさもあるのだが、なにより、六年ぶりに感じる一夏の暖かさを感じていたかった。

それにこんな状態の私を一夏が放っておくわけもなさそうだから、私は自分の気の済むまで一夏に甘えることにした。

## 一夏

昔から、箒はこうすると大人しくなる。両親が姉の束さんにかかりつきりで箒は甘えたいときに甘えることができなかった。

道場で剣を教えている箒のお父さんと接することができる剣道に打ち込んでいた。私も姉さんの勧めでここで剣を学んだ。

その時から箒は、男勝りで口調と態度が厳しかった。それ故に男子からは”男女”と虐められ、口調ゆえに女子とは中々、打ち解けられなかった。

落ち込んだ箒は、両親に相談することができずに道場の裏でいつも  
うずくまっていた。

口だけでは、箒の気が晴れないことは幼いながら私は知っていた。  
花を見せたとしても。

”一夏：人間が人を傷つけるのは、その人の”温もり”を知らない  
からだ。だから、”温もり”を知ること傷つけようとは思わなく  
なる”

”人間は、忘れやすい生き物だ。だから、時々、温もりを思い出さ  
せてやれ。優しく抱きしめてやれ”

姉さんも私が寂しそうにしていたら、何も言わずに抱きしめてくれ  
ていた。だから、箒にも……

箒が剣道で相手を叩きのめすようになったのは、人の温もりという  
物を忘れかけただけだから……

道場でギャラリィが固唾を呑んで見守っていることに二人は気づかない。

「織斑君って……大胆……」

「篠乃之さん。幼馴染だからって、それはないよ」

「……男に抱きしめられているというよりも、あれってお姉さんに甘えているみたいなんだけど……」

後に箒は、クラスメイトや剣道部の面々に追及されることになるのだが、それはまた別の話である。

道場で試合を終えた二人は、寮へと戻る道を歩いていた

「なあ、一夏。少し遅れたが、六年前に私に渡してくれた”アレ”は覚えているか？」

箒は、自らが持つ”花のブレスレット”について一夏に聞く。

「私が箒に渡したブレスレットだね。まだ、持っていてくれたんだ。私も栞にして持っているよ」

一夏の言葉に、箒は嬉しそうに笑みを浮かべ

「そうか、そうか」

本人も何を言いたいのかわからないのか、そんな風に言葉を繰り返しただけだった。

「箒。夕食のときに、お互いに見せ合おうか？六年振りの再会だから……」

「そうだな。絶対に忘れるなよ」

箒

一夏は、私が思う以上に強くなっていた。力だけではなく、心も私  
が思う以上に強く……

同時に思う。どうすれば、その”力”が得られる？どうすれば、強くなれるのかと……

私は未熟者だ。確かにある程度”力”は得たが、心があまりにも弱すぎる。

幼い頃のように一夏は、私を気遣ってくれ。だけど、私は、ただ一夏に護られるだけの女にはなりたくない。

私から一夏を抱きしめ、支えられる立場になりたい。一夏に遠く及ばない私は、本当の意味で”強く”になりたい。

いつかは、自分が一夏を護れるようになりたい……

だから、オルコットには絶対に負けるなよ。いや、お前が負けるはずがないものな……

ISという”力”で押さえつけるだけの者に、本当の意味で”強い”お前が負けるなど……

夕食の時、向かい合う二人の間に六年前と変わらない”花のプレスレット”があった。

それは、六年前に別れた二人の再会を願って作られたもの。六年ぶりに二人は再会を果たした。

#### 第四話「篠乃之箒」（後書き）

書き終わった後で、色々とやっちゃった感がありますが、こんな感じでもいいかな。

うちの一夏は、ある意味男前です（笑）こういう事を人目を気にせずにはやっちゃいますので……

……  
魔戒騎士の皆さんは、基本言葉よりも行動で示しますよね、想いを

箒をデレさせるといった目的も達成したので良しとしますか。

……  
今回は、いよいよセシリア戦ということで、セシリアの出番が増えます。此処のところオルコットでしか呼ばれていませんでしたので

……  
今回、ヴリルが一言も喋っていません（笑）その代わり一夏の師匠を少しだけ、出しました。

女は男よりも強い。これが、今時の女の考えか？

まったく、ISってのは厄介だな。一夏、その考え、跡形もなく粉砕してやれ。

次回！「クラス代表決定戦」

蒼き牙 青い雫と今、対峙せん。

## 第五話「クラス代表決定戦」(前書き)

どうも、NAVAHOです。

いつもながら、皆様、感想ありがとうございました!!!

最新話ができましたので、掲載します。今回もかなりの難産でした  
(汗)

牙狼は、今回も面白く”カ”について、改めて考えられる話でした。

今回のアクションを見ていて、生身でホラーとあそこまで渡り合える魔戒騎士は、生身でもISと普通に勝てそうと思いました。

ラストでは、久々に零もでてきて、これからの盛り上がりを楽しみな回でした。

それでは、どうぞ!!!

## 第五話「クラス代表決定戦」

セシリア・オルコット

織斑一夏。この世界で唯一のISを操縦できる男性。女性にのみ許された”力”を扱えるとは、不愉快ですわ。

それに男なんて、力に媚びるだけの卑しい生き物。このISが出る前は、男尊女卑で、腕力にものを言わせていたようですが、今やISにひれ伏している。

ISを扱える女性の中でも上の立場にある専用機持ちであるワタクシに対して、怯みもしない。

クラス代表には、ならないがワタクシに勝つつもりでいるあの生意気な男には、制裁が必要ですよ。このブルーティアーズで……

男なんて、所詮はワタクシの前にひれ伏すしかないんですわ……

あの人のように……

威厳も誇りも無かったあの人のように……

”xxxxxxx?セシリア”

あの人が昔、ワタクシに何かを言っていたようですが、そんなこと、

忘れましたわ。覚えていても、ワタクシにとって、どうでもいいとですから……

クラス代表戦が行われる三日目の日もまだ上がらぬ早朝、一夏は学園から少し離れた場所で魔戒弓を振るっていた。

日課の鍛錬である。魔戒弓で大きく弧を描き、時には大きく振りかぶる。

「一夏…せいが出るな。あの生意気な小娘には、後れを取るなよ」  
ヴリルが一夏に生意気な小娘こと、セシリア・オルコットの戦いについて言う。

「言われるまでもないよ、ヴリル。オルコットの”陰我”は、この私が必ず断ち切るさ」

「ああ〜、お前もとんだお人よしだな。あんな小娘のことにまで気を配ることなぞ……」

「ヴリル。私はただ、魔戒騎士としての務めを果たす。ここに”陰我”を生む要素があれば、それを封印、消滅させるのが私の使命だ」  
一夏は、鍛錬を終わらせ、寮へと戻っていった。

「まったく、お前って奴は本当に生真面目な奴だぜ」

## 放課後

第三アリーナは、これまでにない熱狂に包まれていた。

理由は言うまでも無く、世界初の男性のIS操縦者 織斑一夏の姿を見ようと言うこと。その一夏とイギリスの代表候補生セシリア・オルコットとの試合を見るためである。

ピットに向かう一夏は、IS学園の制服、一夏のIS用のスーツは、ダイバースーツのようなものである。

身体のラインがそのまま出ており、首から下で出ている肌は無い。胸のところにはプレートと小さな機器のようなものがある。

プレートの内側には、ヴリルを収納するスペースが存在する。

「東さんには感謝だな。しかし、顔を出せないのは不満だ」

視界が見えないわけではないが、本人は顔を出してISの乗り心地を体験したいらしい。

「ヴリル。お前は、何をしたいんだ？」

「何って、ここにいる内は勉強だろう。これも勉強だな」

もしかしたら、自分以上にこの学園生活を楽しんでいるのではないかと思う一夏だった。

第三アリーナ・Aピットに着いた一夏を迎えたのは、姉の千冬、真耶、篝の三人であった。

「着たか、織斑。まだ確認はしていなかったが、お前の専用機を見せてもらおうぞ」

教師として千冬は、一夏にISを展開するように促す。

「織斑君って、スタイルが良いんですね」

真耶がこの場で関係の無いことを言う。箒は、一夏の姿を見て顔を赤くして視線を逸らした。

箒

戦いの前に一夏に激を飛ばしたかったのだが………できなかった。

現れたのは、身体のラインにピッタリとしたスーツを着た一夏だった。一夏に私は見惚れてしまった。

華奢だとは思っていたが、奴の身体は”男”のものではなかった。完璧な”女”のラインだったのだ。

肩幅は私よりはあるが、長身なために目立っておらず、ウエストも括れている。私よりも細いかもしれん………

あれだけの”力”がこの身体の何処にあるのだ。あの細腕に………あの華奢な身体に………

私は、目の前の一夏が眩しくて顔を赤くして俯いてしまった。

同時刻、Bピットではセシリアが自身のIS ブルー・ティアーズを展開しアリーナ上空に現れた。

彼女が展開したISは、青を基調としたドレスのようなデザインであり、彼女自身の美しさを全面的に押し出すものだった。

ISは女性のみが動かすことができるため、このように操縦者の美しさを押し出す要素が強いのだ。

セシリア

ワタクシの専用機 ブルー・ティアーズ。我が祖国イギリスが開発した最新鋭の第三世代のIS。

世界の中でも僅かしか、開発の目処が立っていないこの第三世代のISであれば、負けるはずがありませんわ。

あの男のISは、どういうものかは情報が入りませんでした。篠乃之博士の妹と剣道をして、それに勝ったと言う噂ぐらい。

おそらくは、接近戦を挑んでくるでしょう。ですが、このブルー・ティアーズは遠距離射撃型。

近づくことができなければ、何もせずに落とせますわ。

ワタクシに口答えしたことを後悔させてあげますわ。それに誰が、代表に相応しい実力を持つかを分かせてあげますわっ！！！！！！

セシリアのISは、一組のクラスメイト達の姿を捉えていた。

彼女らは自分にクラス代表になってほしくないようだが、ここで”力”を示せば、認めざる得ないだろう。

Aピット

「オルコットは既に出たか：私も行く。蒼牙つ！！！」

左手のブレスレットを掲げると同時に、待機状態にあった蒼牙が展開する。

その姿は、蒼を基調とした鎧を全身に纏い、背中には、六枚の羽がマントのような状態で待機している。顔の上半分を覆うのは狼を模したバイザー。

誰もが目を引くのは、バイザーの後部に取り付けられた赤い長髪を思わせる”エネルギーアキュメーター”

赤の鬘を持つ蒼い狼。その姿に、千冬は少しだけ頬を引きつらせた  
「……………束の奴め。私とそのデザインが嫌いなことを知ってのこと  
だろうな」

蒼牙の姿は、一夏が魔戒騎士として鎧を召還し纏った姿に酷似しているのだ。違いは鬘を持っているぐらいである。

”さすがに、いつくんの鎧の造詣は束さんには、まねできないね”

とある男に完璧な造詣と絶賛された”魔戒騎士の鎧”。束もまた、

騎士達の鎧の造詣を絶賛している。

「……箒、言ってくる」

一夏は、自分に視線を向ける箒に声を掛ける。

「あ、ああ。必ず、勝って来い」

バイザーのために、一夏表情は隠れているが口元が笑っているのを箒は見た。前を見据えると同時に、背中左右合わせて六枚の羽を展開して、ピットを飛び出した。

ピットから飛び出した一夏は、アリーナの地表に着陸し前方に浮かぶI.Sを展開したセシリアを見上げる。蒼と青がそれぞれ対峙する。

「最後のチャンスですわ」

優越感たっぷりに一夏を見下ろし、

「そう、このまま戦えば、ワタクシの勝利は自明の理。今ここで謝ると言うのでしたら、許して差し上げないこともなくってよ」

対する一夏は、相手がいつでも戦闘に入れる体勢になっていることを察していた。

「初めから私をISでいたぶるつもりの人間がその口を言うか。何処までも耳障りな口だな、オルコット」

「相変わらずの減らず口ですわね。あなたには、教育、いえ、仕置きが本当に必要ですわっ！！！！」

一夏の態度に青筋を浮かべながら、セシリアは射撃態勢に入り、一夏にロックオンを定めた。

「このまま。お別れですわっ！！！！」

大型ライフル スターライト MK?より、一夏目掛けて高出力のビームを放った。

一直線に向かってくるビームを見据える一夏は、

「……………来い、”雪片”」

右手にブレードを展開し、そのまま構え、踏み込むようにして迫ってきたビームを縦一文字で切り裂いた。

切り裂かれたビームは左右にそれ、そのままアリーナの地表で爆発を起こした。

後頭部の赤い鬘を揺らしながら、一夏はゆっくりと歩みを進め、雪片の切っ先をセシリアに向けた。

「……オルコット。来るなら、本気で来るんだ。私は、慢心して倒されるほど甘くは無いぞ」

「そつだぞ、小娘。一夏と蒼牙を舐めんなよ。生意気な口は、今から塞いでやる。一夏、ぶちのめしてやれ」

パイロットスーツ越しからヴリルが声を掛ける。ちなみにヴリルの声は、セシリアには聞こえていない。

「す、少しはやるようですわね。ですが、これならっ！！！！！！」

高出力ビームを切り裂かれるなど予想もしていなかったのか、セシリアは半ば驚いていた。

彼女は、自身のIS ブルー・ティアーズ最大の武器である 第三世代用 兵器 BT”ブルー・ティアーズ”を展開した。

「踊りなさいっ！！ワタクシ、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でる円舞曲でっ！！！！！！」

ビット型自立稼働兵器 BT”ブルー・ティアーズ”

機体の名前の由来にもなった4機のビットは、一夏に向かっていった。

ピットでは、蒼牙が展開した武器を見て千冬、真耶は驚いていた。

「せ、先輩。あれって、雪片ですよね」

「……ああ、束の奴め。一夏も一夏だ……私に対する当て付けか？  
二人して……」

言葉こそは、憎まれ口だったが口調は穏やかだった。まさか、ここで自分が愛用していた武器を家族が使うとは予想をしていなかった。千冬も知っているが、一夏は魔戒弓という剣と弓の機能が一緒になった武器を使う。故にISでの戦闘もそれに準ずる物と考えていた。

（魔戒騎士ならば、ISが相手でも遅れは取らんと思っていたが、  
一夏を見る限り、その通りか……）

仮に一夏がISを展開していなくても、ISと互角以上に戦えたのではと千冬は思う。

弟である一夏が強いのは、姉としては嬉しいが、その強さがどのようにして得られたかを思うと素直には喜べない。

本来ならば、ISにも関わらせたくなかったのだ。それどころか、一夏はISが抱える闇以上に深い闇の世界に身を置いている。

だが千冬も今は、ISで一夏が如何にしてセシリアに勝利するかが気になっていた。そして、一夏がセシリアに何を見ているのかを……

(凄い、これなら勝てるぞっ!!!一夏っ!!!)

篤は、自身の想像を大きく越える強さを持った一夏に対して驚きと同時に憧れを抱いた。

(私もいつかは、一夏のように強くなりたい)

展開されたブルー・ティアーズは、一夏を取り囲み、一斉にレーザーを放つ。

放たれたレーザーを上空へ飛び上がることで回避し、すぐに自身の兵装である”弓”を出現させ、ビーム状の矢をセシリアめがけて放つ。

「くっ!!!?!!!」

ブルー・ティアーズの操作に思考を取られていたためか、あるいは、一夏の異常なまでの早い反撃に対して虚を付かれた。

急いで回避するものの、矢はそのまま肩の部分に当たり、ダメージを受けてしまった。

焦ったセシリアに対して、一夏は冷静そのもの。セシリアが回避行動した時に、足元に見えるブルー・ティアーズを一瞥した。

ブルー・ティアーズは停止している。だが、すぐに一夏を追跡する。

「なるほどな、こいつらと本体は同時には動けないと言っわけか！  
！」

ヴリルが”わかったぞ”と言わんばかりに叫んだ。一夏は、ヴリルに言われるまでも無く察していたが……

「言われるまでもない。このまま、攻めさせて貰う」

一夏は、”弓”を収納し、雪片に切り替えて足元から頭上に現れた四機のブルー・ティアーズを見た。

空間のあらゆる場所から放たれるレーザーを回避するのは、並大抵のことではないが、一夏にとっては造作も無かった。

攻撃をあえて撃たせて、撃った後にできる隙を狙い、手近にいるブルー・ティアーズを薙ぎ払うかのように両断し破壊した。

「……まずは一機」

セシリア

な、なんですの!?!この男はっ!?!ワタクシのブルー・テイアーズを簡単に破壊するなんて……

こんなこと、今までにもなかったですわ。イギリスでの訓練では、ブルー・テイアーズの前ではどんなものでも数分も持たずに倒されたと言っのに……

本当に、ISを数時間ほど展開させただけでは?軽く見ても、国家代表候補生に匹敵する”実力”ですわ。

ですが、これ以上やらせませんわっ!?!?!男に、負けるなんて、これ以上の恥はありませんわっ!?!?!

セシリアは、残った三機のブルー・ティアーズを戻しライフルによる射撃に切り替えた。一夏とセシリアの距離はかなり離れている。

これを利用して遠距離から狙おうというものである。照準を一夏にあわせ、引き金を引く。フルオートにより連続でビームが発射される。

発射されたビームに対して、一夏は素早く回避し、一夏も遠距離用の”弓”に切り替え、自分を狙っているライフルの銃口目掛けてエネルギー状の矢を放った。

放たれた矢は一直線にセシリアの持つライフルの銃口を傷つけ、発射前だったエネルギーを暴発させ、破壊した。

破壊されたライフルは、セシリアの手から離れアリーナの地表へ落下する。

「っ!!?!?!」

歯を噛み締め、セシリアは三機のブルー・ティアーズを一夏に再び差し向ける。

迫ってくるブルー・ティアーズは、一夏による矢を警戒し、一直線には行かずに上下左右に展開するが、一夏はその中の一機に狙いを定めて矢を放つ。

ここで一機に気を取られた隙に、もう一機で攻撃するのがブルー・ティアーズの基本戦術であるが、一夏はそれに嵌ることなく自身を攻撃するブルー・ティアーズに対して、雪片で切り伏せた。

同じく近くに展開していた残りのブルー・ティアーズを立て続けに切り捨てた。

「お前は、ISの”力”に過信すぎだ。その”力”が全てではない」

一夏は、ISの戦闘能力の高さは理解しているが、これを傘にして他を押さえつけることに対して反感を持っている。

女尊男卑に対しての”陰我”。力による支配、力のみが強さではない。”力”のみが、全てを思い通りにできるわけが無い。

「セシリア・オルコット。お前の”陰我”、この私がここで断ち切るっ!!!」

狼を模したバイザー越しに一夏は、ただセシリアのみを見据えていた。

バイザー越しに感じる強い意志をセシリアは、確かに感じていた。四機のブルーティアーズはすべて破壊され、さらにはライフルもない。

近接戦闘の兵装はあるのだが、一夏相手では勝ち目は無い。バイザーで確認することはできないが、見入ってしまうほどの強い瞳をしているのだろう。

あの人とは違う。記憶の中のある人物が持っていなかったものを持っている一夏にセシリアは、魅せられていた。

「……一か八かは、分かりませんが、あの方には一矢を報いたいですわ」

一夏は、決定打を打つために必ず接近してくる。その時が唯一のチャンスだ。ほとんど使うことは無かったが、近接用兵装であるショートブレードを展開した。

だが、セシリアは一夏を待つつもりは無かった。そして、自身が嫌悪する男性に対する心境もまた変わっていた。

”xxxxxだい？セシリア”

一夏

オルコットが近接武装を展開した。主力である武器がやられたからだろうか？いや、違う。先ほどの傲慢な雰囲気は無い。

自分の”間違い”に気がついたように見える。何か大切なことを思い出したことで……

仕掛けるつもりだ。蒼牙もブルー・ティアーズの背部分にあるミサイルを確認している。

気になることがあったので、蒼牙にサーチをさせたら確認を取ることができた。

仕掛けるつもりだろう。なら、私もそれに応えよう。

「一夏、”瞬時加速”を使うつもりか？」

「ああ、そのつもりだ」

「弓でやったほうが早いんじゃないのか？」

「いや、雪片でやる。オルコットも覚悟を決めて、私に一矢を報いる気だ」

「それに応えるつもりか。いいね、さすがは”男の子”」

「……うるさい。無駄口を叩くな」

セシリアは、ショートブレードを構え、一夏に向かっていく。

この展開にはアリーナ全体が驚いた。遠距離を基本とするセシリアがまさか接近戦を挑んでくるとは……

高速で接近してくるセシリアに対し、一夏も応えるように間合いを詰めるべく動く。

セシリア

あの方も、ワタクシに伝えてくれましたわ。ワタクシがあなたに一矢を報いる可能性があるならば、この残されたブルー・ティアーズのみですわっ！！！！！！

蒼と青が互いに向かっていき、激突する。振りかぶるブレードに対して、セシリアは

「掛かりましたわねっ！！！！！！ブルー・ティアーズは四機だけではなくってよっ！！！！！！」

背部分に取り付けられた実弾タイプのブルーティアーズを展開し、攻撃を加える。

一夏は怯むことなく、そのまま”瞬時加速”を行いミサイル二機を雪片で両断し、そのまま勢いを落とすことなくセシリアを切り付けた。

そのエネルギーは凄まじく、まさに一撃必殺の威力でセシリアのエ

ネルギーを0にした。

「試合終了 勝者っ！！！！織斑一夏っ！！！！！！！！」

アリーナに勝利者の名を告げるアナウンスが響いた……

Aピット

真耶は、先ほどの試合内容を見て驚いていた。

「凄いです。あの一瞬で……織斑君は、本当にISを一ヶ月動かしていただけなんですか？」

「ああ、ISの起動時間に関してはオルコットに及ばないが、あいつはそれ以上に、私達の”想像を絶するモノ”を相手取っていた。他のブルー・ティアーズについても予想ができていたんだろう」

「なんですか？その想像を絶するものって？」

「山田君が気にすることは無い。アレは、ここには絶対に現れる」とは無いのだから……」

その時の千冬は、何かに怯えているように見えた。それは、絶対に遭遇したくない何かに対して……………

(……………そうだ、ホラーはここには、現れない。現れてはならない)

一夏が関わっている闇については、悩むところだが、今は、クラス代表の事をどうするかが千冬の悩みだった。

「そんなことよりも、一夏はクラス代表を勝ってもやらんと言っていた。どうしようか、山田先生」

「ええっ、やっぱりそうですかっ!?!でも、やっぱり織斑君が代表になるべきじゃ……………」

真耶個人としては、一夏に対する評価は高い。人格、戦闘能力共にクラスの代表としては十分だ。

「勝ってクラス代表になることは、オルコットのようになんか力で押さえつけてしまうことと同じと一夏は言っている。あいつは、首を縦には振らん」

「ええっ、じゃあ、誰がクラス代表をやるんですか?他のクラスは既に決まっているんですよ」

涙目の真耶に対し、千冬はあの一度決めたら梃子でも動くことの無い頑固者を思うと頭が痛くなった。

「ああ……………一夏のことだから、何か考えがあると思うが……………あいつの考えは私の想像の斜め横に行くから」

ピットのディスプレイには、ブルー・ティアーズを解除し、気絶したセシリアを抱える蒼牙を展開している一夏の姿があった。

「一夏、お前が勝つって信じていたぜ」

「…言ったろ、遅れを取るつもりは無いつて…」

バイザーをつけている為、一夏の表情は隠れているので良く分からない。

「そこは、当然勝つと決まっているといえよ」

ヴリルもまた、顔を出していないので、外からは表情が分からない。

「ISで戦った感じはどうだ？」

「ああ、鎧とは違い少し頼りないけど……ソウルメタルと違い、このままでも人に触れられる」

「ああ、そうだな。鎧と違って、そこはいいところだ」

一夏の腕には、ISが解除されたセシリアの姿があった。ソウルメ

タルで作られた”鎧”は、特殊な性質ゆえに魔戒騎士以外の者が触れることはできない。

Aピットに戻った一夏は、待機していた医療班にセシリアを託し自身もまた、この場を後にすべく立ち去ろうと足を進めるが、

「織斑君……クラス代表のことなんです……」

真耶が戸惑いながら一夏に声を掛ける。

「山田先生。勝ってもクラス代表になるつもりはないと言ったはずですが……」

「ですが、クラス代表はやっぱり織斑君がなるべきだと……」

真耶は、クラス代表になってくれないかと一夏に問うが、一夏からの返事は”ならない”。

「おいつ、一夏。お前は、国家代表候補生に勝ったんだぞ。これは、凄いことだ。誰もが認めざるえないことだぞ」

箒が、真耶に加勢する形で一夏に言葉を掛ける。彼女もまた、一夏のクラス代表就任を望んでいるようだ。

クラスメイトのほとんどが物珍しさから一夏を推したようだが、一夏の実力は本物である。これは事実なのだ。

千冬は、言葉を掛けないが本心では、クラス代表に就いてほしいと願っている。だが……

「オルコットを”力”でねじ伏せて、代表になったところで、彼女はこれからどうなる?」

一夏の意外な言葉に一同は、目を丸くした。

「一夏、オルコットが負けたのは、単にお前よりも弱かっただけだろう?これは、オルコットが望んだことだから、それからのことは”自業自得”ではないか……」

箒は、セシリアが自ら一夏に火の粉を振りかけて、それで返り討ちになったことは自業自得と言う。確かにその通りではある。

「織斑君の言いたいことは、分かりますが。オルコットさんは、少し行き過ぎた考えを持っていましたから、これを機に反省をしてくれれば……」

真耶もこれはセシリアにとっていい薬になったのではと思っている。

「たとえ、振りかかった火の粉を払うためでも、私は自分の言ったことは絶対に曲げるつもりは無い。それに……」

一夏は一呼吸入れて、三人を見据えた。

「オルコットをあのままにしていいいわけが無い。確かに”力”を誇示して、それを強要した。本人の自業自得とはいえ、これからの周りは彼女をどうみるか、分からないわけではないだろう」

自らを実力者と称していたが、いざ、勝負をしてみれば圧倒的な大差で敗北したものに、周りは何を見るだろうか？

クラスの中には、セシリアに反感を持っていたものはそれなりに居た。あのままでは、確実に孤立してしまう。

「私は、オルコットの傲慢を叩きたかっただけで、彼女を貶めるために戦ったわけではない」

その言葉に二人は、それなら尚更、一夏が就くべきではと思う。だが、一夏はクラス代表にならない。それを曲げるつもりは無いのだ。

「私は、言った。オルコットの陰我を断ち切ると……」

一夏は、言葉を切りその場を後にするように立ち去った。これから、一夏が何をやるのだろうか？

それが分かっているのは、姉である千冬 ただ一人。

(……一夏、お前は魔戒騎士として”陰我”を許すことはできないのだな)

医務室でセシリアは眠っていた。不意に、気配を感じ身体を起こすと入り口のところ腕組をし、壁に寄りかかっている一夏の姿があった。

「あ、あなたはっ！？！お、織斑さん、ど、どうしてここへ？」

目が覚めた途端に、出くわした意外な人物に対してセシリアは声を上げて驚いた。

「そうだね、話をしにきたと言っておくよ。セシリア・オルコットさん」

一夏の言葉にセシリアは、気が楽になるのを感じた。自分が罵倒し、オルコットと不快感を露にしていた人物が態々 さんを付けてくれたのだ。

「そ、そうですの。あ、あなたに、まず、謝らなければなりませんわ。申し訳ありませんでしたっ！！！！！」

セシリアは頭を下げ、一夏に謝罪を行う。

「いいよ、別に気にしては居ない。確かに、女が偉いと言われる中では、私の態度は生意気かもしれないが、それなりに意地があるから」

一夏は、それだけで十分だと言わんばかりに笑いかけた。これに対して、セシリアは自分が思っている以上に気を重くしないで良いと判断した。

「織斑さんは、とてもユニークなんですね。そうやって、ワタクシに言葉を掛けてくれるなんて……」

「ブラックジョークが売りのイギリスでも通用するかな？」

「ふふふ。ええ、織斑さんなら十分やっていけますわ」

三日前は険悪ともいえる関係だったが、今は和やかな雰囲気であった。対立の果てにISで試合をしていたもの同士とは思えないほどの……

「話だけど、私に、いや男性に対して、何故、オルコットさんは、あそこまで”嫌悪”を顕に？」

「ええ、話を聞いてくれますか？」

一夏

話を聞くと、彼女がイギリスの国家代表候補生になる数年前に、両親が列車事故で他界したという。

オルコットさんの母は女尊男卑以前より、たくさんの会社を営んだ成功者であり、由緒正しき名門の貴族の出だった。

父親は婿養子として、結婚をしたが、由緒正しき名門貴族である妻に対する夫は人の顔色ばかり伺っており、幼い彼女からは情けない男として見られていた。

家庭でもほぼ別居に近い形でほとんど顔を合わすことがなく、事故の日に限って一緒だったという。

彼女の元には、莫大な財産が残された。それを狙う親戚を称するハイエナのような人間だけが群がってきたのだ。

いわゆる金の亡者だ。古今東西、金は人間を狂わす麻薬と言われる。当然、金銭に関する”陰我”も存在している。

前にも相手をしたことがあるが、気持ちの良いものではなかった。そんな人間に付きまとわれると気が立ち、そんな男ばかりでは男性に”嫌悪”を持つのはある意味当然だ。

”女尊男卑”に関する”陰我”もそうだが、金銭に関する”陰我”は、魔戒騎士の中でも一、二を争う忌々しいものだ。

親が残してくれた遺産を護るために、必死で勉強をし、その過程でISの適正值が高かったことで代表候補生としての訓練を経て、専用機 ブルー・ティアーズを任されるに至った。

だが、少しだけ気になることがある。幼少期から、男性に対しての不信感を持つ彼女が、男性である私と、仮に情けない男と正反対な存在であってもこのように和やかになれるだろうか？

知り合いに私と同じ”体質”の知り合いが居るが、その知り合いは、男女共に嫌悪しており、仮に親切なものと接しても壁を作って拒絶してしまう。

父親が原因らしいが、それだけではないはずだろう。ISによる”女尊男卑”も関わっているかもしれない。

「オルコットさん。本当に父親はそこまで情けない人物だったの？」

「そうですね。あの人は、いつも母の顔を伺ってばかりでしたわ」

父親の事については、はき捨てるように述べる。

「今のオルコットさんを見る限り、父親もオルコットさんが思うほど情けない人ではなかったと思うよ」

「ど、どういうことですか？今のワタクシとあの人が、どう関係してくると？」

「うん。私は”女尊男卑”に関する厄介ごとは何度も見たけど、徹底した考えの者は、何が何でも男を認めようとはしなかった」

脳裏に、それに関する”陰我”から出現したホラーの姿が浮かぶ。憑依された女は、自業自得で災難に遭い、それを男のせいにしていった。

「オルコットさんは、試合に負けたけど、私が勝ったのは、まぐれだと思う？」

「そ、そんなはずはありませんわっ！！！！織斑さんの力は本物ですっ！！！！！！」

「今の世の中だと、まぐれで勝ったとか言われるんだけど、オルコットさんは私をこうして認めている」

「それが、何故、あの人と？」

「オルコットさんは、何か忘れていることがあるんじゃないか？父親のことで……」

師の言葉が浮かぶ。あの言葉は、人の悲しい性質を言っていた。

”悲しいかな、人は嫌なことも忘れるが、愛されていたことも忘れちまうんだ”

「ワタクシが忘れていること？」

「オルコットさんは、父親の負の面ばかりが目立っていたけれど、私とこうして話ができているのは、負の面だけではない所もあった

はずだ」

私の言葉に、オルコットさんは何かをふと思い出したように目を見開いた。

セシリア

母は、強い人でした。厳しくも温かい人でした。それは、過去形。もう何年も前に事故で父と共になくなってしまったのですから……

思えば、母と違い、父は情けない人でした。

婿養子で母の顔色を伺ってばかりで、幼いながら思っていました。

”情けない男とは、結婚しない”と……

でも……本当に情けない人だったのでしょうか？

”どうしたんだい？セシリア”

思い出してみれば、人の良さそうで腰の低い人でしたが、ワタクシが母に叱られ、庭の隅で泣いていた時、真っ先に声を掛けてくれたのはこの人だったではありませんか……

ワタクシが落ち着くまで、母との間を取り持つてくれたではありませんか…

鬱陶しがっていた母でしたが、なんだかんだ言っつて父を思っていたのではないですか…

織斑さん。今、あなたの試合中の言葉の意味が理解できましたわ。

”力”が全てではない。あなたは、ワタクシの傲慢を指摘していたのですね。

ワタクシは、イギリスの代表候補生。最新鋭の第三世代 IS ブルー・ティアーズの専属操縦者。故にこの力に溺れていたのですね。

それなのに、ワタクシは……、ISという絶対の”力”に溺れ、それを他に強要した。溺れていたが故に優しくかった父を貶め、忘れてしまった。

だからこそ、あなたはワタクシに不快感を抱き、他の方々もワタクシをクラス代表に推さなかつたのが分かります。

思えば”女尊男卑”の考えなど、あまりに行き過ぎていて、間違つた考えではありませんか。

かつての”男尊女卑”は、男の方々がその腕力にものを言わせていました。それをISの力を得たからと言っつてワタクシ達が行つていいというわけではありませんわ。

「やっぱり、ただの情けない人ではなかつたんだね」

「ええ、ワタクシは親不孝者ですわ。優しかった父親を忘れてしま  
うなんて…それどころか、貶めてしまつて……」

「優しかった父親なら、今、オルコットさんが思い出してくれただ  
けで満足してくれているんじゃないかな」

「そうです…織斑さん。よろしければ、ワタクシをセシリアと呼  
んでくれませんか？ワタクシも一夏さんと呼ばせていただいても」

「構わないよ、セシリア」

「ありがとうございます。一夏さん」

その後、間もなくして一夏は医務室を後にした。残ったセシリアは、  
一夏の事を考えていた。

（織斑一夏。あなたは、まるで”騎士”ですわ）

日本で言うと侍が当てはまりそうだが、セシリアが一夏に抱いたイ

メージは”騎士”だった。

誰かが間違いを犯そうものなら身を持って、その人のために剣すら握ると言う御伽噺にある存在。

故にもっと知りたい。あなたの事を……そして、あなたに近づきたい………

## 第五話「クラス代表決定戦」（後書き）

セシリアの女尊男卑ですが、原作もそうですが、情けない父親と正反対であってもそうそう認めないだろうと思って、試合の後に仲良くなるのは普通無いよなど、仮に勝っても、中々認めないとも思いました。

もしかしたら、父親の悪いところだけが目立っていて、良いところをセシリアが忘れてしまい、周りに影響されてあんな風になったのではと思い、こういう具合になりました。

次回予告をいつものように、入れておきます。それでは、では！！！！

IS学園、ここは陰我の色が濃く、いつかはホラーが出ると思っ  
ていたが、

此処から出るんじゃないかと、まさか、この学園を目指すとはな……

一夏、絶対に近づけるんじゃないぞぞつ。

次回！「訪問者」

懐かしいあの子と再び、めぐり合う。

第陸話「訪問者」(前書き)

ええと、明日から少し忙しくなりそうなので、早めに掲載しちゃいます。

いつも感想、ありがとうございます。とても励みになります!!!

どうもわざわざ、どうも!!!……!!

## 第陸話「訪問者」

「だから、違うんだっ！！！僕は、何もやっていないっ！！！」

男は両脇を二人の警官に抱えられながらも、叫んでいた。だが、警官は聞き入れずに機械的に男を独房を突き飛ばし、そこへ閉じ込めた。

「待ってくれっ！！！！話を聞いてくれっ！！！！！」

男の言葉を見殺しにして警官は背を向けて去っていった。

「くっ、くそっ、な、何でこんなことに……」

膝を突き、男は自身の身に起きたことを振り返った。

偶々、会社帰りに百貨店へ故郷の家族への贈り物を買に行った際、そこで女に絡まれて、その女に呼び出された警備員に連れられ、ここへぶち込まれたのだ。

”女尊男卑”あのISという兵器のせい、無条件で女は許される。たとえそれが理不尽なものでも、全て”男が悪い”とされる。

男は、この独房で絶望していた。ここに入れられたら、自身は終わりだ。裁判でも有罪は確定。

先の未来は、光すらなく絶望的なのだ。そこへ……

” 此処から、出してやるうか？”

「だ、誰だっ！?! 誰なんだっ！?!」

不意に声が独房に響き渡った。

” 理不尽な理由で、此处に閉じ込められ、誰もお前の言い分を聞かない”

「……………」

その通りだった。誰も話を聞いてくれない。

” 哀れなお前に力をやるう。力が欲しいのならば、応えよ”

「ああ、僕は力が欲しいっ！……この酷い世の中を変えるぐらいの力がっ！……」

” ならば、与えよう。代価は、お前の”魂”と”肉体”だっ！……！”

独房の隅に影が大きくなり、男を大きく覆い尽くす。影の中心より、”悪魔”が現れた。

数分後、独房に男の姿は無かった……………

その日の夜

「そのあなた、ちょっとこれ持ってきてくれる」

町で女が男に対して荷物を持つように命じる。男と女はこれといった関係のない他人である。

「なによ、逆らう気。ちょっと、その人、この人を警察に……」

女は、近くを通りかかった別の男に命令をするが……

男は、女に対して嘲笑うように……

「誰が何をするんだ？お前は別に何も偉くはないのに、何故、そんなことをしなくちゃいけない」

「あなた、男の癖に女に逆らうつもり？あなたも警察に突き出して……」

そう言おうとした時、男に変化が現れた。目に奇妙な文字が浮かんだのだ。これを見た女は気味悪がり、その場から離れようとするのだが……

先ほど、絡んだ男が女の行く手を阻んだのだ。

「ちょっと、あなた。なに考えてるのよ。そこ、どきなさいよっ！  
！……！！」



「今、一年でクラス代表が決まっていけないのはこのクラスだけだ。誰か、やりたいものは居ないか、それとも推薦は……」

千冬が、クラス代表について話を進めていた。

「あの織斑先生、織斑君は代表にはならないんですか？」

クラスの一人が手を上げて、千冬に聞く。

「ああ、こいつは、勝ってもやるつもりはないようだ。少しくらいは、融通が利けないのか、織斑」

千冬は目の前に居る 弟 一夏に問いかけた。

「織斑先生。三日前にも言いましたけど私は、勝ってもクラス代表にはなりません」

「でも…私は、織斑君について欲しいです」

教卓には、担任の千冬と真耶の二人がクラス代表について一夏に聞いている。

「……私は就くつもりはありません。ですが、私が推した者ならば、文句はないですよね。先生」

この言葉にクラス全体が静まり返った。突然の言葉に意表を付かれたのだ。

「私は、クラス代表にセシリアを、セシリア・オルコットを推しま



一夏も目をきつくして千冬に言葉を返した。二人の睨みあう様は、まさに圧巻である。瓜二つの顔が互いに睨み合っているのだ。そんな二人に挟まれた真耶は涙目である。

「あの時のセシリアは、行き過ぎた考えを持っていただけで、今の彼女は間違いに気づき、それを正している」

その言葉にクラス全体がセシリアに視線を向けた。その視線に対して、セシリアは思わず

「はい、情けない話ですが、ワタクシは国家代表候補生の肩書きと専用機持ちという事で、自分自身の”力”に酔っていましたわ。

ワタクシにも、優しいお父様が居たのにそれを、情けないと言って貶めてしまい、あるうことが男性の方々には大変な無礼を働いてしまいました。

皆様にも、ご家族の方々がいらっしやいますのに、以前の失言は、本当に申し訳ありませんわ」

頭を下げて、謝罪をしたのだ。この行動には、担任、副担任はもちろんのこと、クラス全体が本当に驚いていた。

「確かにセシリアは、皆に不快な思いをさせてしまったけれどもそれに気づき、正しているのならば、これ以上に無い代表は居ないと思う」

一夏の言葉にクラスメイト達は納得せざるえないのか、納得がいかないのか微妙な表情だった。

「今の世の中は、女尊男卑のせいで、間違ったことが通っている。でも、それを自身の身で知ったのなら、その間違いを正すことだってできる」

「い、一夏さん。わ、ワタクシなどに、そのようなことが……」

一夏が自身を評価していることにセシリアは嬉しさと戸惑いを感じていた。

一方でクラス全体は、一夏が推すのならばと……

「織斑君が言うのなら……」

「がんばってよ、セシリアさん」

「応援するから」

まだ尾を引いているのか、クラスメイトの声は微妙な感じであったが……以前と違って、好意の色があった。

「できるさ、私は”間違いを犯し、それを正した人間”をそれなりに見てきた。だから、セシリアにも……」

弱気になりそうだったが、セシリアはここで弱気になってはいけな  
いと思い、

「わかりましたわ、このセシリア・オルコット。クラス代表の任を立派に果たしてみせますわ」

箒

一夏の奴。まさか、オルコットを推すとは……アレほど、不快感を露にしていたのに、よくもあんなに仲良くなれたものだ。

どうやって口説いたかは知らぬが、まさかと思うが、お前は私と離れている間に”女誑し”になったのではないよな？一夏……

”箒…どうしたの？今日は、凄く絡んでくるんだね”

”な、何を言うかつ、お前がオルコットに掛かりつきりで私に構ってくれないからだろ”

”ふふふ、箒は焼餅焼きだね。じゃあ、こっちへきて”

”今日だけは、私だけの……”

”箒、声が小さくなっているよ”

”今日だけは、私だけのお姉さまだ。一夏”

な、なんだ？この光景は……

何故、一夏がお姉さまなのだった？！それに何故、私が甘えているっ！？

あっちへ行けっ！！！！あっちへ行けっ！！！！

一夏は男だっ！！！！！！お姉さまではないっ！！！！！！何を考え  
ている、篠乃之箒っ！！！！！！

箒は必死でその光景を追い払おうと頭を必死で振っていたが、それを無視して千冬が、

「クラス代表はオルコットに決まりになるが、異存は無いか？」

千冬がクラス全体に確認を取る。皆も異存が無いのか頷く。

「でも、織斑君がこのままというのも勿体無いですね」

「そつだな、織斑。お前は、これからクラス代表補佐になれ」

突然、話を振られた一夏は

「もしかして、それはセシリアを推したのならばそれなりに責任を取れと言つことですか？織斑先生」

「そつだ。お前はオルコットをそのままにはしないつもりだったんだろ？」

千冬の言葉に、少しだけ目を逸らしながらも頷いた。

「よし、皆、織斑はクラス代表補佐に就く。これについては、依存は無いか？」

「……………ありませ〜ん……………」

打ち合わせた様に全体が唱和する。一夏は、この乗りの良さに少しだけ引いてしまった。

「一夏……………いい響きだよな。クラス代表補佐」

ヴリルが、一夏にしか聞こえない声で話しかけた。 ” 喋るなど言つたはずなのに………… ” と内心、イラついた。

「い、一夏さん。ワタクシを、いえ、クラスを支えてくださいますか？」

セシリアが頬を赤くして、一夏に尋ねた。

「こうなってしまった以上は、私も全力でクラスを支えるよ」

一夏もクラス代表補佐として、クラス代表をクラス全体を支える事を心に決めた。

「お、おいつ、待てっ!!! オルコット、貴様、さつき、自分を支えてっって言わなかったか!!!?!!」

箒が聞き捨てならないことをセシリアが言ったことに対して、突っ込みを入れた。

「いえ、ワタクシは何も言っておりませんわ。一夏さん……よろしければ、ワタクシとISの訓練をお願いできますか？」

近接戦闘に関しては、ワタクシは一夏さんと比べれば、まだまだですし……」

セシリアは、ピットに頼りきっていた戦いもそうだが、いざと言ったときのための接近戦も重要と考えての提案だったが……

「その必要は無いっ!!!!!! 態々、お前のために一夏の手を煩わせる必要はない!!!!!!」

箒は、好意的な笑みを浮かべるが微妙に青筋が出ているのは、気のせいだろうか？

「ここは、専用気持ち同士の方が効率的ですわ、篠乃之さん」

クラスで専用機を持っているのは自分と一夏だけをアピールするセシリアだが、ここで担任からのありがたい”拳”を頂いてしまった。

「痛っ！！！！！」

「アウチっ！?!?!」

セシリアと箒が頭を互いに抑える。

「何を争っているかっ！！！！ここに居る限り、お前たちが、どんな肩書きを持っていようともヒヨッコだ！！！！！！代表候補生もーから、全て学べっ！！！！！！」

担任である千冬の言葉に二人は、黙り席に着くしかなかった。こうして、一組の代表は セシリア・オルコットに決定した。

## 一夏

セシリアからは、ISの訓練に誘われた。私としては、蒼牙を動かしてまだ一ヶ月程しかたっていないので、できる限り訓練は行っておきたい。

束さんからは、一応教えてもらったが……………

” いったくん、ズガンって感じに”

” ポンポンって、飛んでみて”

” いったくん、グツと行く感じで”

” ババっという感じで武装を展開して”

正直言って訳が分からなかった。一応、姉さんにも教えたといっていたけれど、姉さんも同じ感じだったのだろうか？

今は、SHR中だから後でセシリアに私からお願いをしようかな。

時刻は、夕方の七時を回ったころ、寮の食堂では一組のメンバーに  
よる……

「セシリアさんとクラス代表就任と織斑君のクラス代表補佐就任、  
おめでとう……！！！！！！！！！！」

「「「「「「おめでとう~~~~っ」「「「「「」

パーティーが開かれていた。

クラッカーが鳴り響き、その中心に居るセシリアと一夏をたくさんの女子が祝っている。

一組のメンバーは、ともかく他のクラスの人達の姿も見える。

「これから、クラスも盛り上がるよねえ」

「織斑君が、クラスを支えてくれるんだよ、この一年が凄く楽しみだよ」

「ラッキーだね」

「ほんとほんと」

クラスメイトの騒ぎようにセシリアは、笑みを浮かべているが、一夏の表情は少し硬い。

「一夏さん、もう少し、にこやかにしてくださいな。綺麗な顔がもったいないですわ」

「セシリア。私は、こういうのが少し苦手だな。戸惑ってしまってあれほど、堂々としていた一夏がこのように戸惑うと思うと少しおかしかった。

「うふふふふ、一夏さんにも苦手なことがあるんですね」

「ああ、少し情けないかもしれないが……」

「フンっ、人気者が何を言っている」

一夏の反対側になるように、箒が現れた。手に飲み物を持っていて、むりやり一夏に手渡す。

「あら、箒さん。無理やりはよくないですよ」

「ふん、これが私のやり方だ」

意気地になっているのか、箒は一夏がセシリアと仲良くなっているのが面白くないらしい。

「セシリア、箒には箒なりに私を気遣ってくれているんだから」

ここで一夏が、箒に助け舟を出す。箒は、少しだけ機嫌を良くし、

「そうだ、これが私のやりかただぞ。オルコット」

そんな三人に近づくボイスレコーダーを持った上級生が近づいてきた。

「はいはい、そこ盛り上がってるところを悪いけどインタビューいかな?」

名詞を差し出し、「新聞部副部長 黛薰子」と書かれてある。

「では、さっそくだけど、クラス代表補佐の織斑君に特別インタビューをおねがいします」

「……………」

正直、一夏はこういうのが苦手なために少し戸惑ってしまった。

自身がISを動かしてから、マスコミや各国の上層の人間が押しかけてきたが、一夏はこれらから、逃れるべく様々な知り合いの家を転々としていた。

一ヶ月ほどは、束のところでISを学び、そのあとの一ヶ月は、閑岱を含めた魔戒騎士達の元やそれ以外の知り合いの元にお邪魔していた。

自宅には、マスコミが居なくなるのを見計らって帰っていたが……

「一夏、情けないぞ。たかが、インタビュー如きで」

「第、私はこういうのには、慣れていないの」

そんな二人に構わず薫子は、

「ずばり、クラス代表補佐になった感想をどうぞっ！……！」

マイクを差し出された一夏は

「ええ、私の力の及ぶ力のかぎり、代表のセシリアとクラスの皆を支えていけるようがんばりたいと思います」

「おおっ、男とは思えない、セクシーな声っ！……！」

薫子は、一夏の声を聞いてボイスレコーダーだけでは、男だとは分

からないなと思った。

「一夏、お前はいつになったら声変わりをするのだ？」

「……いや、私の声の事を言われても……」

篤の言葉に一夏は、少し困ってしまった。どんなに頑張っても自分は、低い声が出せないのだから……

「まあ、そこは置いておいて、もっと他にはないの？学園唯一の男子だからさ、この学園の女子は”俺の物”とかさっ」

「なっ、なんて破廉恥なっ！！！！」

「あなたには、聞いてないから、少し静かにしてね」

一夏にインタビューをしているのだが、何故か篤が反応することを鬱陶しく思ったのが薫子は、そんなことをたまいました。

「まあ、この辺は適当に捏造しておくことにしてとにして、次はセシリアさん、代表になった感想ちょうだい」

「ワタクシ、こういったコメントはあまり好きではありませんが、代表になったからにはしっかりと役目を果たさせていただきませわ」

「なるほどね。噂に聞いた印象とは随分と違うわね。もっと、偉そうに言っちゃうかと思ったんだけど」

「どんな噂かは、わかりませんが、ワタクシが変わったのなら、それは一夏さんのおかげですわ」

セシリアの言葉に薫子の目が妖しく光った。一夏は、何か良からぬことを思ったが、口には出さなかった。

「なるほど〜、織斑君に惚れたからってことね」

「なっ、なななな……」

薫子の言葉に、セシリアは顔を赤くしてテンパってしまっている。

面白くなさそうに篤は、一夏とセシリアをじと目でみる。

「とりあえず、写真を撮りたいから、クラス代表補佐の織斑君とクラス代表のセシリアちゃん、並んでもらえる？」

「なにっ!?!」

篤がまるで仇に会ったかのような凄んだ目で薫子を見る。

「注目の二人だからね、ツーショットもらつよ、握手とかしてくれるといいかもね。何なら、肩でも組んでもらっていいからさ」

「だめだっ!?!?!それはだめだっ!?!?!」

篤が一夏とセシリアの間に割って入るように抗議を行う。

「そうだ、そうだっ!?!」

「織斑君は、皆を支えてくれるから、共有財産だから、独り占めはだめーっ」

クラスメイトの反応にセシリアは残念そうだったが、ツーショットならと言う事で納得した。

「じゃあ、握手でいいね」

これならいいと許せるのか、箸をはじめとしたクラスメイト達も了承した。

「それじゃあ、撮るよー。35×51÷24は〜？」

「……74・375」

一夏は、何故、この掛け声なのか不思議に思いながらも応える。そんな一夏の思惑をよそにデジカメのシャッターが切られた。

気がつけば、ツーショットではなくクラスメイト達が二人の周りを囲っていて、集合写真になっていた。

「ちょっと、ツーショットではありませんのっ!?!」

セシリアの声に対して、

「いいじゃない、クラスの思い出ってことで」

「そうそう、思い出よ、思い出」

皆でセシリアを丸め込めるようなことを言っており、セシリアは何も言い返せなかった。

かといって、一夏も一夏でどう言っているのか分からないのか、苦笑いを浮かべていたのだった……

## 一夏

すまない、セシリア。私はこういふとき、どうすればいいのか、分からない。

思えば私は、こういう風に乗って騒ぐといふことは、ほとんどしなかったな。

私とセシリアのために、パーティーを開いてくれているのは嬉しいのだが、この気持ちをどう伝えればいいのだろうか？

箒も箒で楽しんでくれてそうだし……

パーティーは、その後も盛り上がりを見せ、一組だけではなく他の組の者も加わって更に盛り上がった。

セシリアは、完全にパーティーの中心として楽しんでいた。

一夏も一夏で中心であったが、こういうのが苦手なのか時折、席を外して気を休めていた。

この時も少し席を外していた。

そこへ、仕事を終えた真耶が一夏の元へやってきた。

「織斑君、楽しんでいますか？」

「ええ、こういうのは初めてですが、まあ、楽しんでいます」

「そうですか、それなら良かったです」

真耶は笑みを浮かべて、一夏に応えた。

「そういえば、織斑君。さっき、妙な人からこれを織斑君にとって…」

真耶は思い出しように一夏に赤い封筒を手渡した。手渡されたのは、赤い封筒”番犬所からの指令”だった。

「おい、一夏。何だ？その悪趣味な封筒は」

箒は、一夏が手に持っている封筒に対して、不機嫌な目を向ける。

「箒、悪いけど、用事ができたから、席を外すね。山田先生、このことは皆に言っておいてください」

二人に断りを入れて一夏は封筒を取って、そのまま食堂から抜ける。箒も着いていこうとするが、

「……ここから先は箒の関わる所じゃないから……」

「な、何を、不純異性行為は……」

自分を拒むような一夏に対して、箒はムツとするが、一夏の目を見てしまった。

その目は、彼女が全く知らない一夏の姿だった……

私は、一夏を問い詰めることができないまま、その背を見送ってしまった。

あの目を見てしまったのでは、何もいえなくなってしまう。私達が離れて、六年。

一夏の身に何が起きたんだろうか？あの一夏は、少しだけ怖かったな。

お前は、変わらなかったはずだよな。そうだよな……

「おい、篠乃之。一夏は何処に行った？」

気がつくのと千冬さんが話しかけてきた。意外だ、こういう集まりには来ないと思っていたのだが、

「はい、用事ができたからって何処かへ行きました。変な赤い封筒を持って……」

「赤い封筒だと……」

その時の千冬さんも一夏と同じく私の知らない表情だった。酷く狼狽していた。

すぐに一夏を追うように千冬さんも食堂を後にしてしまった。

一体、何があったんだ？この六年の間に、あの姉弟に……

一旦、部屋に戻った一夏は、魔道火を使い、指令書を炙る。

”女尊男卑”の陰我より現れしホラー。その発端である”IS”を破壊せんとすべく、その地を目指す。これを速やかに殲滅せよ。ホラーの名は、レギオン”

「レギオンだっ?!?!、こいつは厄介なのが来るぞ」

ヴリルが声を上げて驚く。

「レギオン? どういう奴なんだ?」

「ああ、こいつは現れたときは一体なんだが、人間に憑依すると憑依した人間と似た考えを持つ奴を自分に取り込み、巨大化、もしくは、そいつらを元に増殖する」

「となると、厄介だね。もしかしたら、このIS学園そのものを餌場に、いや、それよりも酷いか……」

「それに、取り込んで巨大化するだけじゃなくて、そいつらと群れることもある」

「早いうちに倒していれば……過ぎてしまつては悔やみようは無いね」

「仕方ねえさ、この世情は騎士も法師も人手不足だ。これで二度目だな、巨大ホラーと戦うのは……」

「ああ……分かっている」

一夏は、戦用の服に着替え、魔戒弓を持ち迎撃に向かうべく部屋を後にしようとした時だったが……

「一夏っ！！！何処へ行くつもりだっ！！！！」

いつの間にか、入り口には部屋の同居人であり、姉の千冬が立っていた。走ってきたのか、少しだけ息を切らして……

「何処つて……ホラーを狩りに……」

一夏は、何気ないように言葉を返した。

「何故だっ！！！！お前は、もうこっち側だろうっ！！！！もう向こうに関わる事はっ……」

千冬は思わず一夏の目を見て黙ってしまった。その目は、彼女が最も嫌う目だった。闇を生きる魔戒騎士の目を……

「前にも言ったけど、私はやめるつもりはないよ。だって、いまさら、全てを忘れて生きるほど、器用じゃないから……」

一夏の目は、邪魔をするなら、例えあなたでもと言わんばかりの”殺気”すら秘めていた。その目を直視してしまった千冬は、何もいえなかった。

様々な修羅場を越えてきた彼女であっても、苦手なものを受け入れがたいものは存在する。彼女が苦手なものそれは、護るべき存在である”一夏”がもつ魔戒騎士の目である。

受け入れがたいものは、ISですら滅ぼすことの適わない魔獣”ホラー”。

「……………必ず、戻るから……………話は後でもできるよね。姉さん」

すれ違いざまに一夏は、千冬に声を掛け、彼女に背を向ける形でこの場を後にした。

一夏が去った後、千冬は膝を突いて崩れた。俯いた顔は、悲しみを浮かべていた。

千冬

何故だ…何故なんだ、一夏。どうして、お前は、そうまでしてホラーと戦うんだ。

お前は私が護る。だから、何も気にせず、穏やかに日常を生きてくれ。そう願っていた。

かつて、私と束は、お互いの大切なもののためにこの世界を変えた。

私の大切なものが一夏。一夏は、他の人とは違う悩みを持って生まれた。男でも女でもない心と身体を持って……あの時の社会なら一夏は半端者として、男達から下に見られていたかもしれない。

だからこそ、一夏にとっても暮らしやすいようにと私は、束の作ったIS”白騎士”を駆った。

だが、世界は思い描くようにはならなかった。その最もたるのが”ホラー”の存在だ。

私達は、あのとき以上に”陰我”と言うものを生み出し、ホラーにとって都合の良い世界に変えてしまった。

そのために一夏は……魔戒騎士に……



” ああ、一夏は、これから多くの人を救う。それをここで、失うわけにはいかんっ！……！”

鋼牙という男は、剣を頭上に翳し、円を描いて、一夏のように鎧を召還した。その姿は、眩いばかりの黄金に輝いていた。

そうだ、あの時一夏を救ったのは、”黄金騎士 牙狼”だった。私は何もできずに終わってしまった。

だからこそ、怖いのだ。自分の手が及ばないところに居る一夏がいつか自分を置いて何処かへ行ってしまうのが……

” 姐さん…もう少し、大人になったらどうだ？”

いつも一夏の傍に居るあの不届きモノが、いつか言っていた言葉がよぎる。何を言っている、私はもう大人だぞ。ただ、一夏が大切なだけだ……

私は、一夏が育てた花の前に立っていた。これは、一夏が家から持ってきた私物の一つで私も気に入っている奴だ。

そういえば、花にも性別がなかったな。一夏は花のようだな。だけど、日のあたるところではなく、闇の中に咲いている……

ある一団がIS学園を目指していた。それは、数十人からなる男達  
が集団を組んで進んでいたのだ。

彼らが進むたびに辺りの雰囲気は暗くなり、また、その場に居合わ  
せてしまったものは影に飲み込まれ、一団に加わってしまう。

その先頭にいる男は、数百メートル離れた場所にあるIS学園に視  
線を向け、嗤った。瞳に魔界文字を浮かべて……

「僕は、今日、この社会を変えてみせる。この手に入れた”力”で  
っ！！！」

男に合わせるように、集団の面の皮膚が割れ、そこから醜悪な”悪  
魔”の顔が現れる。目は赤く、禍々しく輝いていた。

「行くぞっ！！！！！！！」

これから起こす革命に対して、意気揚々と進もうとするのだが、

「……………悪いが、この先には行かせる訳には行かないよ」

集団と対峙するように、蒼いコートを靡かせる人物が一人。弓を持  
ち、それに付けられている刃を向けて……………

「なんだっ、お前は、まさか、IS学園の関係者か？女あッ」

集団と対峙する一夏は、少しだけシニカルに笑い、

「お前達の天敵だ。それと、私は、どちらでもない」

ホラーに対して、一夏は弓を構え、牽制する。

「魔戒法師かつ、ならば、恐れるにたらんっ！！！」

ホラーは、自身の集団の何人かを一夏に差し向けた。差し向けられた者達は、様々な凶器を持ち、一夏に襲い掛かる。

その瞬発力は人間のそれを遥かに超えており、並みの人間ならば、あっという間に袋叩きにされ、餌食にされたであろう。

一夏は、魔戒騎士である。故に、集団にたいして、切り込み、三人を同時に地に伏せさせた。

直ぐに立ち上がり、蹴り、拳、凶器による攻撃が一夏を狙う。狙いに対して、一夏はこれを回避し、魔戒弓による斬撃ですべて切り伏せた。

相手の腕が飛び、足が切られ、凶器は破壊された。

倒される集団に対して、ホラーは

「その弓、まさかソウルメタル。貴様、法師ではなく、魔戒騎士だ  
というのか？」

「ああ、どちらでもないがな」

言葉と共に、矢をホラーに対して放った。放たれた矢に対して、腕を甲殻類を思わせる物に変えて、それを防いだ。

「なるほど、最近よくみる。男らしくも無ければ、女らしくも無い半端者か？だが、僕の敵じゃない！！！！！」

男の身体が弾け、中からホラー レギオンが姿を現す。それは、三つの角をもつ甲虫を思わせる頭部を持ち、半身は蛇の尾の姿をしていた。

それだけでは、終わらずに回りに居たものを取り込み始めた、一夏のすぐ傍に転がっていたモノも手当たり次第に、

肉体が溶け合い、黒い瘴気と共にホラー レギオンが巨大化していく。巨大化したレギオンは有に十メートルはあるであろうという巨体であった。

その光景に、一夏は……

「前に戦ったのよりも遥かに大きい」

「ああ、こいつを絶対に学園には近づけるな。入らせたら、とんでもないことになるぞ」

ヴリルの言葉に頷く。このホラーならば、IS学園を一晚で全滅させるだけの力はあるであろう。

一夏は、地を蹴り、普通ならありえない高さまで飛び上がったと同時に、レギオンの頭部めがけて矢を放った。

放たれた矢は、二、三発と放たれるが、レギオンの皮膚は硬く、矢は全て跳ね返ってしまう。

「っ!!?!?!?!」

普通なら、刺さるはずだが跳ね返ってしまうのは、流石の一夏も驚いてしまった。

レギオンは、宙に居る一夏に対して、禍々しい角を突きたてるべく突進を行った。迫る角を刃で受け流しながら一夏は、ホラーの身体に飛び乗るが、

飛び乗った瞬間、皮膚からまるで浮かび上がるように、小型のレギオンが姿を現したのだ。一夏の前後を取り囲むように

「これが……」

「ああ、分裂だ。気をつけろ!!!!!!」

前後から来る小型レギオンの攻撃を魔戒弓を大きく振りかぶることで防いだ。金属音がなると同時に二体のレギオンが吹っ飛ばすが、その瞬間に地響きと同時に足場が揺れる。

レギオンが動いたのだ。動いたレギオンに合わせる様に、小型の二匹は溶け込むように本体の中に還った。

足場があまりにも悪いため、一夏は、一旦レギオンの本体から降りる。数メートル先まで離れて、一夏は

「巨大化と分裂……恐ろしく厄介な能力だ」

「そうだ、レギオンはかなり厄介だ。どうやって、片付ける？」

一夏の言葉にヴリルが問う。一夏の答えは決まっている。戦いを長引かせるわけにもいかない。

「これで、決めるっ!!!」

その言葉と同時に一夏は、魔戒弓を頭上に掲げて、円を描き”鎧”を召還する。光と共に蒼い狼を模した鎧が現れた。

同時に大きく変化した魔戒弓を掲げると同時に、魔道火を矢に点火させ、レギオンに放った。

狙うは、レギオンの蛇のような皮膚をした半身。この部分は、頭部のように硬い外骨格で覆われてはいない。

一夏の狙い通り、矢はレギオンの半身に刺さり、炎が侵食し、その身体を粉碎する。だが、巨体だけに、致命傷には至っていない。それどころか、再生をしている。

再び矢を放つべく弓を構えようとすると、レギオンはその巨体をもつて一夏に突進を仕掛けてきた。

恐ろしい硬度を誇っているレギオンの外骨格を正面から受けるのは、魔戒騎士でも厳しい。故に一夏は、上空に飛び上がることで回避する。

アスファルトが割れ、地響きで震える。魔戒弓を構え、魔道火を伴った矢をレギオンの半身に放つ。だが、身体から現れた分身が盾と

なり防ぐ。

矢で消滅させたのは、分身であり、本体には傷がついていない。

「くっ！？！矢が何本あっても足りないっ！！！」

レギオンは一夏の狙いを察したのか、周りを固めるように自身の分身を出現させた。

「まったくだ。何で、こんな奴が出てくるんだっ！！！！！」

ヴリルも、レギオンの能力に対して辟易していた。細かいところを狙っても分裂か再生を繰り返す。

「だったら、烈火炎装で奴が分裂も再生ができないぐらいに切り込むっ！！！」

一夏は、魔戒弓に魔道火の炎を纏わせたと同時に自身の鎧にも炎を纏わせた。橙色の炎が蒼い鎧を照らす。

横一文字に魔戒弓の刃による魔道火を帯びた剣圧が一直線にレギオンの半身を切る。切られた半身は魔道火により燃え上がる。だが、身体はまだ残っており、そこから、二体目のレギオンに成ろうとするが……

一夏は既に駆け出し、さらなる剣圧を近い距離から放ち、二体目に成ろうとしていたレギオンを魔道火の炎で、焼き尽くし、消滅させた。

上半身だけのレギオンは信じられないのか、呆然としていた。無限

に再生と増殖を繰り返す自身の身体を消滅させるなど……

一夏は、レギオンの上半身よりも高く飛び上がり、魔道火を帯びた魔戒弓による斬撃は、レギオンを真つ二つに焼ききったのだ。

焼き切られたレギオンの左右の身体は消滅したと同時に一夏はアスファルトの上に着地した。

一夏と同じく、奇妙な肉の塊が目の前に落ちた。うつすらと男の顔を浮かべて……

”嫌だ…僕は、この酷い世界を変える力を得たんだ。あそこには、全ての元凶があるのに……”

悔しそうな男の顔に対し、猛々しい蒼い狼は、

「たとえば、この世界を酷い物に変えた元凶であっても、私にとっては、かけがえのない”大切な人達”だっ！！！！！！」

魔戒弓の炎を未だ衰えず、肉の塊に対して大きく振りかぶり……

「それにお前は、ホラーに憑依された時に死んでいたっ！！！！！！」

振りかぶられた炎は、肉の塊を塵を残さずに消滅させた……

鎧が解除され、辺りには静けさが漂った。不意に懐かしい感じを背後に感じ、振り返った。

「久しぶりね、一夏」

目の前に小柄な少女が立っていた。

「鈴」

彼女の名は、凰 鈴音。一夏にとって、筈に続くもつとも懐かしい存在である。

「ああ、久しぶりだね。一年ぶりかな」

「そうね、アタシもこの一年を頑張ってきたわ」

鈴は、一夏に自身の相棒である大筆の”魔道筆”を掲げた。

「魔戒法師になれたんだね」

「何言ってるのよ。アタシは、まだまだ半人前よ。烈花さんからは、飯免の評価だから……」

その言葉と同時に鈴の肩に、小さな魔戒魚が姿を現した。

鈴

IS学園に向かう途中で、まさか一夏とホラーとの戦いに出くわすなんて……アタシはとことん、厄介ごとに縁があるらしい。

IS学園に来たのは、アタシが魔戒法師として、一夏の補佐役として指令が出たからだ。

アタシ自身も驚いたわよ。だって、まだ修行をして一年ぐらいのアタシが前線に行くなんてね。

当然、この一年は死にそうな目には、何度も合ったし、目を背けたくなるようなものだって見てきた。

半年程、閑岱で基礎を学んで、経験を積むために魔戒法師の烈花さんに師事してきた。

”もっと冷静になれ……頭に血が上りやすいのは、お前の悪い癖だ”

”愚か者っ……！ただ敵を倒せばいいのではないっ……！！”

”俺達が護らなければならぬのは、多く人々の未来だ！！！！敵を倒すよりも護ることを優先しろっ！！！！鈴っ！！！！！！”

”甘いつ！！！！俺がホラーならば、シグトは死んでいたぞっ！！！！”

”卑怯？それをホラーに対しても言うつもりかっ？”

烈花さんは、本当に厳しかったわ。口調は”俺”で、一夏以上に男らしい女の人だった。

話を戻すけど、IS学園に向かう途中でアタシは、一夏が巨大なホラーと戦っているのを見た。一年前に比べると格段に強くなっていた。

アタシじゃ、まだ届かない。一夏が、どれだけ努力を積んで魔戒騎士になったかはよく分かっている。だって、魔戒騎士は決して才能だけじゃなれない。

才能以上の努力が必要だったから……、一夏は、普通の魔戒騎士なら倒すのが困難な巨大ホラーを倒した。

目の前にいる一夏は強くなっている。だけど、アタシよりも綺麗になっっているのは納得できない……………

一夏と鈴は、IS学園の校門前を揃って歩いていた。

「鈴。元気だった？」

「元気も元気ね。烈花さんの前で落ち込んだら、アタシが元気になるまでボコられるわよ」

鈴は一夏に、自身の師匠の理不尽さを語る。一夏は、鈴が相変わらぬ様子なので、思わず笑みが浮かんだ。

「シグトの優しさが身にしみるわ」

生意気にも年上の、先輩の魔戒法師を呼び捨てである。これは師匠がないからこそ、言えるのだ。

「私は、鈴の師とは面識はないけど、いい魔戒法師なんだね」

「ええ、お父さんもお母さんもいい人だって、言ってくれてるわ」

鈴は、まるで自分の事のように嬉しそうな笑顔を一夏に向けた。幼いながらも、人の気持ちを暖かくさせてくれる笑みだ。

「それと、一夏。たまには、アタシん家に顔を出しなさい。お父さん、嘆いていたわよ、”恩人”が来てくれないって」

「ああ、でもおじさんとおばさんは、鈴が魔戒法師なのは、平気なの？」

「千冬さんみたいなお事、言ってんじゃないわよ。アタシは自分で考えて決めたの、お父さんとお母さんとちゃんと向かい合ってるね」

鈴の言葉に一夏は、

「そうか、私は失礼なことを言ってしまったな」

「そうね。もう少し、察しなさい。あんたも”女の子”なんだから」

茶目つ気たつぷりに鈴は、一夏の鼻の先に指を当てたのだった……

彼女は、一夏が”IS”インターセックス 中性であることを知っている。

「そうだな、一夏。一応、お前も女なんだからじゃなくて。鈴、そこは、男も女も関係ないんじゃないか？」

先ほどから黙っていたヴリルが会話に加わる。

「あ、そういえば、あんたも居たわね。ヴリル」

「居たわね、じゃねえよ、俺を無視するとは、いい度胸してんじゃないか？」

ヴリルが、俺が折角、気を使ってやったのと言わんばかりに言いあげた……

翌日、パーティーを途中で抜け出したことについてセシリアに少し、言われてしまった一夏だったが、放課後にISの訓練に付き合うということで機嫌を直してもらった。

そんな一夏を篤は、少しだけ不満な目で見ていた……

篤

あの後、一夏はパーティーには戻らなかった。皆、残念がっていたが、私としてはこれ以上一夏が他の女に気を取られないで思うと良かったと思ってしまうが。

千冬さんも戻ってこなかったし、あれから一夏は何をしていたのだろうか？

あの怖い目をしていた一夏。そして、昨晚、一夏と親しげに話していたあの”女”。

一夏の事が気になって探しに行ったが、何処にもいなかった。

一時間経ってから、私は一夏を昇降口付近で見つけた。声を掛けようとおもったが、できなかった。

なぜなら、一夏の隣に私の知らない女が居たからだ……

親しげに話すその女は、誰なんだ？一夏……

それにお前は、今、何をしているんだ……私の知らないところ？

## 第陸話「訪問者」（後書き）

さて、ホラー介入と同時に鈴 参戦。彼女は、魔戒法師です。師は烈花で、彼女同様に魔戒魚を用いた術を使います。

よくクロスモノで鈴が代表候補生でありながら、確かオーズとのクロスでバースをやっていたのがありましたので、

思い切って代表候補生ではなく、一般生徒？な立ち居地で、強化で魔戒法師になりました。強さに関しては原作よりも少しだけ上という具合です。

回想では、ありますが鋼牙ができませんでした。一応IS原作にも出演はありますので、ここだけでは、終わらないです。

中国の代表候補生は、一応IS学園にいますが、モブっぽい人物です。二組在籍ですよ。

今回は、ISの部分とGARROの部分の折り合いが中々難しかったです。

ラブコメっぽいのは、苦手だなと思うしでした。

それでは、予告を……

さて、鈴と再会した俺たちだが、二人のお嬢ちゃんに様子が少しおかしいな？

お前達二人は、一夏に恋でもしたか？だったら、生半可な気持ちで近づいたら、許さんぞ。

鈴は、一夏を真剣に想っているんだからな……

次回！「凰 鈴音」

さて、これからは面白くなりそうだな。特に一夏の周りが……フフ  
フフフ

ああ、そうそう、作者が牙狼の番外編の”呀 暗黒騎士 鎧伝”で流れたEDをFULLで聞いてな、それに感激して

短編を書いたらしいぞ。何でも、クロスオーバーでだが、意外と周りの奴から好評で連載も考えているらしい。

ペースは、二週に一度ぐらいでやる予定だとよ……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9077w/>

---

IS x GARO

2011年10月26日12時36分発行